

2



0000230000

0000230-000

715-287

裏から見た支那人

笠井孝・著

高山書院

昭和12

AAB

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月23
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので



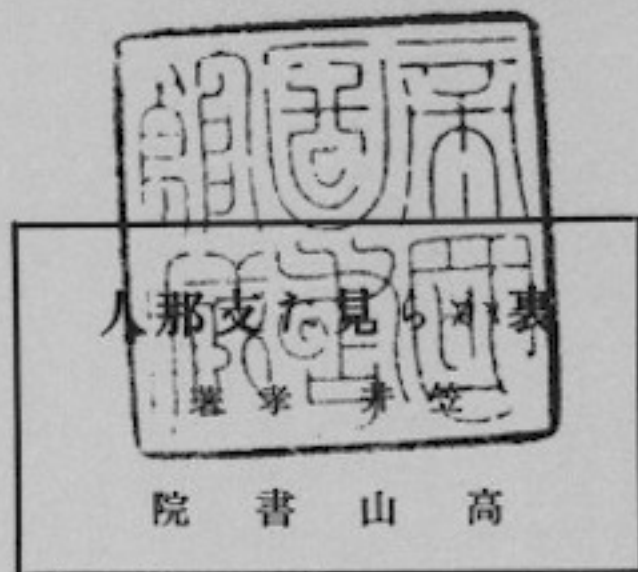
序に代へて

一 本稿は支那人、特に支那の主要民族たる漢民族の特質を、拾ひ上げたものであつて、就中その惡徳方面のみが、多過ぎる嫌ひがないでもない。素より支那人にも美點はある。併しながらそれあるが故に、その惡徳方面を見逃す譯には行かない。そこで私は、この方面について、私の體驗を、極めて率直に記述した次第である。

二 滿洲の漢人と、支那本土の漢人とは、血族に於いても、性格に於いても、多少の差異はあるが、滿洲國が出来たからとて、その爲め滿洲の漢人だけが、一躍美化された譯ではないから、本記述は、この點にも取捨をして居ない。

三 本稿は主として昭和五、六年の頃、業務の餘暇を以つて、已に記述されありしものを蒐集して、隨筆的に書き改めたもので、内容の検討、記述の整理共に不十分ではあるが、過去多年に亘り、沿く出先きの者の實地體驗せる報告を基礎とし、これに筆者の十數年間に滿喫せしめられた實例や、支那人から飲まされた煮え湯の味感やらを、加味して記述したものである。

序に代へて



院 書 山 高



恐らくは大多数の讀者は「イクラ支那人だつて、マサカ斯んなではあるまい、支那人だつて人間である」と、御考への向もあることであらう。それはそれで宜しい。

四 併しながら、やがて幾年かの後に、諸君が支那人と死生を共にし、利害を共にしようとして、幾度か鮮やかな背負投げを演習せしめられた時に、この小冊子を籍かれたならば、思はず小肆を叩いて「ナール程」と三嘆せられる場合があり得ると、私は確言して置く。

五行文摘、爲めに意到らず、往々にして徒らに支那人の惡徳汚點だけを摘發するに急、却つて感情的に過ぐるやに思はれる點さへあり、支那人の美點を賞める暇のなかつたことを、詫びすると共に、他日續編に於いて、支那人の美點を褒める機会を、持たたいものだと思つて居る。従つて本稿は、云はゞその前編である。

著 者 誌

目 次

緒 言

露の支那—支那は國家にあらざ—日支は兩立せず—日支親善は大馬鹿—同文同種は惡案也……………一
支那を測る尺度……………三

研究の手段—標語—心理—道徳—習慣—歴史の要—尺度……………三
漢民族概観……………四

シャボン王—多元的黃河の文明—世界の坩堝—アヤイナ—領土觀念—輻燭の光—國
家觀—社會文化……………六

支那を編する家族制度……………七
密妾と陰險—同種團結—食客三千人—質屋と骨董屋……………七

統治者と被治者……………八
官吏不娶—良政は無爲—製官と換地—軍用金—影法師と金だけ—有厄介な政府……………八

國家組織と社會組織……………九

支那は國家にあらず―自警團―非法治國―我利我慾―散砂……………二

匪 賊 の 國
兵匪―土匪―學匪―中憲匪國……………七

支那人の宗教觀
儒教―敬天と天命説―仁義なく忠孝なし―醜惡の美化―陳平と漢王―頂門の一針―佛教―
現世を樂土―道教は現世教―一圓か五錢か―功過格―玉皇帝―莊子の無役無用―老子の三
賈―揚子の利己―墨子の兼愛……………三

實 利、我 利
借妻―賣兒―泣き女―ロボット―軍人の念願―商業道德―藥販……………七

自 己 保 存
官吏の心―我不關―病人は請負―親子の情―株式會社―洞ヶ峠……………七

金 錢 慾
ニタリ、ゴコロリ―二圓に負けろ―賣國―火事場の水―掛け値―俵屋―親善論―金故に……………七

賄 賂 の 國
吉良上野介―無給のコック―門鏡―外水―中飽―技師長―三方が五圓―廣金局―警官の儲け口……………六

面 子
ラツキョウの皮―乞食にも面子―相見の禮―紙幣ピラで頼つべた―仲談と警察―顔體表―
妙な園子―賣國奴―三千世界の烏―野黨と閨男―友人殺―報國の裏……………一〇

忘 恩
肺肝と天目―叛逆の名人―利用された日本―御禮は現場で―親切は斧で―恩義は商取引―
神機も御商賣―豫謀野暮―命がけも表情で……………一三

殘 忍 と 冷 酷
馬革―姪婦を裂く―血染の饅頭―人肉服―屍衣―子女賣買―香具師―火事場―あゝ無情……………一五

目 次 終

支那は國家にあらず—自警國—非法治國—我利我慾—散砂……………二二

匪賊の國

兵匪—土匪—學匪—中華匪國……………二七

支那人の宗教觀

儒教—敬天と天命説—仁義なく忠孝なし—醜惡の美化—陳平と漢王—頂門の一針—佛教—
現世を樂土—道教は現世教—一圓か五錢か—功過格—玉皇帝—莊子の無役無用—老子の三
寶—楊子の利己—墨子の愛愛……………三三

實利、我利

借妻—賣兒—泣き女—ロボット—軍人の念願—商業道德—藥販……………三七

自己保存

官吏の心—我不關—病人は請負—親子の情—株式會社—洞ヶ峠……………三七

金 錢 慾

ニタリ、ギョロロ—二圓に負けろ—賣國—火事場の水—掛け値—俵屋—親善論—金故に……………四二

賭 路 の 國

吉良上野介—無給のコック—門錢—外水—中飽—技師長—三方が五圓—釐金局—警官の儲け口……………四六

面 子

ラツキヨウの皮—乞食にも面子—相見の禮—紙幣ピラで頬つべた—仲裁と警察—頰徳表—
妙な面子—賣國奴—三千世界の烏—野黨と間男—友人税—報國の裏……………四九

忘 恩

肺肝と天目—叛逆の名人—利用された日本—御禮は現場で—親切は斧で—恩義は商取引—
紳様も御商賈—豫讓野暮—命がけも表情で……………五三

殘忍と冷酷

馬革—妊婦を裂く—血染の饅頭—人肉販賣—屍衣—子女賣買—香具師—火事場—あゝ無情……………五七

目 次 終

裏から見えた支那人

笠井孝著



支那は國家にあらず—日支は兩立せず
日支獨善は大馬鹿—同文同種は愚案也

華府會議に於いて、韓國代表フリアンは「支那とは何ぞや」と云ふ謎のやうな疑問を、昇ぎ出したが、確かに支那は謎の國であり、魔の國であり、東洋のスフィンクスでもある。歐洲に偏在する國際聯盟が、支那問題に如何にも認識不足であり、また如何にもアヤフヤであつたのはマダしもあるが、お隣りの日本人も、また支那の實體を、究明することが、如何にも不十分ではあるまいか。日本人は、従來口を開けば、直ちに日支共存共榮を唱へ、同文同種を振り

緒言

かざし、或は日支の黄色同盟を唱へるものすらあるが、これまた支那に對するペラボウな認識不足と云はなければならぬ。外國育ちの似而非支那人孫中山が、三民主義の大旗を振りかざして、中華民國の革命を提唱するや、恰かも新興支那人の復活であり、明治維新の再來であるかの如く、支那革命に隨喜の涙を流した日本人も、決して少くはなかつた。

併し私をして言はしむれば、如上の支那観は、憐れむべき謬れる支那觀察であつて、支那の主要民族たる漢民族の性情を知らず、世界文化のバチルスである漢民族の暗黒性狀を、顧慮外に置いたものであり、結局は日本人の支那に對する研究不足に、出發して居るものであると言はねばならぬ。私をして忌憚なく云はしむれば、漢民族は四千年來のスレ、カラシであり、頽廢民族であり、従つてまた支那は、東亞平靜の痛でもある。

支那は一つの社會ではあるが、國家ではない。少くとも近代組織の法治國と、見做すべき國ではない。或は寧ろ支那は、匪賊の社會であると云つた方が、適評である。然して土匪、政匪、學匪、これ等は支那に横行するところのバチルスである。

日支共存共榮など云ふことは、複雑なる漢民族の心理状態から見れば、實に嗤ふべき口頭禪であるに相違ない。「物資の貧弱な日本が、物資の豊富な支那に對し、文化の貧弱な東夷日本が、文化の勝れた大中華に對する慾求から出た叩頭である」と見るのが、彼等であり、且つまた支那人固有の道義觀念、ならびに心理状態から割出された日支親善觀なのである。

然して「日本は貧乏で、支那に求むるところあるが故に、親善を言ふのみ。日本のやうな小國は、嚇しつけてしまへば、譯もなくへこむだらう」と考へて、持出されたものが、すなはち數年前の排日運動である。自尊と、自惚れと、利害打算の排日は、恐らく今後も永久的であると見るべきであらう。永久の排日と、日支の共存共榮？ それは餘りにも解決の困難なる、然して到底兩立すべからざる二つのテーマではある。

昨今の言葉を借りて言へば、滿蒙は日本の生命線であり、大陸發展は、日本の死活問題であらうが、併し歐洲全土にも匹敵すべき、然して日本の二十六倍にも相當すべき四百餘州の大地域と、多大なる物資とを擁して、支那大陸に頑張つて居るものは、漢民族である。従つて漢民族との關係を調節せずして、滿蒙を語ることは末葉である。然かもこの民族の複雑なる、多面的の心理状態と、その傳統的以夷制夷の政策とは、永久に日本と兩立すべからざるものがある。

この故に支那に對する穩和主義、叩頭主義をカナぐり捨て、新たなる立場に於いて、日本の死活問題を考へ、新アジアの行途に立脚して、冷靜にこの民族を研究し、冷靜にその對策を講ずることこそは、日本刻下の急務であらねばならぬ。

この意味に於いて、私はつぎに忌憚なき漢民族の内幕を、解剖して見ようと思ふ。これやがて日本の執るべき對支政策の基調ともなり、また對支發展の礎石ともなるべきものである。

支那を測る尺度

研究の手段—横顔—心理—道徳—習慣—歴史の裏—尺度

研究の手段

支那を研究するには、その國民性を解剖し、之を討究して、有らゆる方面から、觀察する必要がある。斯くてこそ、謎の國支那も、自然に氷解せられ、それ／＼の場合に應じて、支那人を如何に扱ふべきかと、自然に釋然たり得ることと思ふ。支那國民性の解剖に方り、唯單に、我々自己の不完全なる過去の常識から、これを類推することは、頗る危険である。例へば女は、マダを有するものなりとの過去の經驗から類推して、芝居の役者は、女なりと速断するのは、笑ひものであると、同一である。

日本人の支那觀には、この種の類推の過失を招き易きものが多々ある。支那人の心理は、日本人の常識では、到底解し得られざるものがある。故に吾々は、先づ彼等の國民性の因つて來

るところの根本原因を、研究して掛らねばならぬ。

然してこれが爲めに研究すべきことは

(一)支那民族の歴史的、地理的、民族的地位

(二)支那國民性の根本である道德觀念

(三)支那人の民情と、大きな關係を持つ其の家族制度、統治者と被統治者、國家及び社會組

織の特異なる點

(四)支那の文化の特別なる状態

等であらねばならぬ。これを更に約説すれば、日本人と支那人との間には、これ等の諸現象の間に、著しき根本的の觀點の差異があり、またその原因となるべき生活状態、風俗、習慣の間にも、甚だしき運庭のあることを考へねばならぬ。以下これ等に關する二、三の注意を概説して本文に入らう。

支那人の横顔

支那の研究は必要であらうが、さて然らば如何に研究するかと云ふことは、必らずしも簡單なる問題ではない。研究方法と云つても色々ある筈であるが、私は先づ初學者に、支那人及び支那が、如何に日本と異なるかといふ點だけを、研究することを切望する。これが釋然たり、會心の了悟を得られない限り、支那の研究は、未だ門に入らずと云はれても致方がないと思ふ。従つて本書には、その研究の便宜上、支那人なるものを知るべき極めて初歩のアウトラインを記述して見たいと考へる。率直に言へば、日本人の支那研究は、頗る浮調子であると云ひ得る。日本人は能く國際聯盟や、歐米諸國の支那に對する認識不足を攻撃するけれども、日本人また支那に對する認識不足に於いては、敢て聯盟や、歐米諸國に劣らない方である。近頃一部識者の間には「支那通支那を誤る」と稱し、歐米仕込みのハイカラ道德を以て、直ちに對支態度を、決せんとする人々があるし、さらに「支那通は、支那だけしか知らない。彼等は我々の如く歐米を知らない。歐米を知らずして支那が分るものか」と云ふ歐米通もある。かと思ふとまた二、三十年來の謂はゆる支那浪人を以つて、一括してこれを支那通と考へる人もあるが、これ等のもの總て適當な態度ではない。餘談ではあるが、謂はゆる支那通にも色々ある。一は、支

那通りである。謂はゆる支那に對する鳩旅行で、上海から漢口、北平、天津と、汽車で一巡して、早速支那通を振り廻す、つまり支那を素通りする連中である。その二は支那通ひで、一年に一度か二度、支那の政情觀察の爲め支那に通うて、支那最近知識の保有者と、自惚れる連中である。それから三は、支那に多年在住して、支那を知れりと自ら任ずるが、然りとて支那語すらも、十分には話せず、支那の奥地を旅行したことすらなく、只自惚と、大言壯語以外には、何も研究もしない謂はゆる自稱支那通である。

併しながら今や支那は、是等の歐米通や、支那通によつて、料理せらるべき時代ではない。日本は、自己の死活問題といふ點から、卒直、且つ赤裸々に、隣人の内容を解剖して掛らねばならぬ。支那人は、世界稀に見る複雑なる心理状態の持主であり、多面體心理の保持者である。由來研究には、先入主となることは、禁物であるけれども、彼等の著しき特異點は、大要だけは、必ずこれを心得て掛らねばならぬのである。

複雑なる支那人心理

日本人は途上で友人に出逢ふと、「ヤア」「イヨウ」と、まるで劍術の掛聲のやうな挨拶をするが、そこに、日本人の竹を割つたやうな心持が、表現されて居る。

併し支那人は、この場合、「ワイ」とか「ウエイ」と呼ぶ。呼ばれた本人は、何事だらうかと、先づ一思索した後、徐ろに身體を捻ぢ向けて、「ウワイ」とか、「ウウウエイ」とか返事をす。この返事が、また頗る曖昧模糊として居つて、イエスであるか、それともノーであるか、またその中間であるのか、ハッキリして居ない。これは支那人の習慣として、黒白をハッキリしない方が、通例であり、且つ保身の術にも叶うて居るからである。

支那では、黒白を明言せず、黒から白に至るまでには、鼠、灰色、淡白など幾百種の色別け、使ひ分けがあるので、日本人のやうにイエスか、ノーの二色だけでは、行けないのである。従つてコンな妙な返事が、持出される譯であるが、曾て張作霖が、北京入城の途中、天津に滞在したことがある。「何日まで御滞在ですか」と問ふたところが、「住一天」と答へた。翌日また尋ねたところが、また「住一天」と答へた。「住一天」とは「一晩泊る」と言ふことである。斯くて彼は十日餘りも、天津に滞在した。

支那人は、彼等の愛蔵の骨董品を賣めて、幾何位しますかと尋ねると。彼は「一百多塊錢」と答へる。百圓餘りと言ふことである。百圓餘りとは、百一圓から百九拾九圓までのこと積りである。こゝ等にも、彼等國民性の曖昧模糊たる特殊なる閃きがある。

支那人の道德観

凡そ一國の國民性は、その民族の歴史、文化、政治組織、社會狀態、環境等によりて、左右せらるゝものであつて、我々日本人の道德觀念を以つて、直ちにこれを支那人に適用せんとしたり、我々日本人の善惡の尺度、我々の心理狀態その儘を、直ちに支那人に適用しようとすることは、間違ひである。

日本人の中には、我も人なり、彼も人なり、苟くも至誠を以つてこれを導けば、支那人と雖も、必ず反省するだらうと考へたり、自己の環境と、自己の習慣から、その儘これを支那人に適用し、支那人を批判しようとする者があるが、これ等は何れも至當でない。二、三の例を挙げれば、支那人は、好んで人の品物を盗むが、これが發見せられても、別に悪いと思はないの

みならず、その品物を取戻すと、折角取つたものだから、幾分か手間賃を呉れると言ふ。斯んなのが日本人では、一寸理解し兼ねる心理狀態である。

また支那には「男女七歳にして席を同じくせず」とか、または「途に遺を拾はず」などと云ふことがあるが、これは七歳で同席したり、遺失物を横領したりするからこそ、是正の必要があり、その爲めに發生した道德律であり、警戒の言葉であるに過ぎない。これをエライなど、誤まつて考へるのは、親子を取違へたやうな事件である。

支那人は忘恩的であつて、御禮を言はないと、八益しく憤慨する人があるが、支那人に言はせれば、一度御禮を言へば、それで澤山であると考へて居り、日本人のやうに、出逢ふ度毎に、何回も御禮は云はない。またそれが彼等の習俗である。

習慣風俗の差異

一々この種の心理狀態の相違を、拾ひ舉げて居たのでは、際限がないが、日常の風俗習慣の上からも、支那人と、日本人とは、甚だしく相違して居る。日本人のマツチの摺り方や、鉛筆

の削り方と、支那人のすることは、全然アベコベであり、日本人は、鉤や、鋸を、自分の方に引くが、支那人は、先方に推して行く。食事の時に、我々は箸を横に置くが、支那人は必ず縦に置く。洗面をするにも、日本人は、両手に水を掬つて、手でブル／＼とやるけれども、支那人は、手の中に顔をつけて顔をクルリ／＼と廻す。一事が萬事、所變はれば、品變はる。日本人と、支那人とは、色々に違ふものである。

支那人は、婦人の室を窺くことを極度に嫌ふ。また足首を出すことを、非常に淫猥なこと、考へるなど、習慣上からも、種々違つて居る。また同じ支那人でも、北方人は、氣が長くてユツタリして居るが、南方人は、氣短かで、多少日本人に似た點がある。

この外日本人の皇室に對する觀念の如きは、支那人には、到底解し得られない事件であつて、日本人の皇室觀と、支那人の君臣觀念との間には、全然合流し得ない根本的相違がある。國境觀念や、國家觀念も、また全然違ふところがある（これは別に後で述べる）。宗教的な考へに於いても、支那人の考へ方は、何處までも現世主義、その場主義であることは、これまた後に述べる通りである。

美化された歴史の裏

支那研究に方つて、心得なければならぬことは、支那の文獻は、美文を以つて、醜惡を美化し、不仁不義を覆ふて居ると云ふことである。このことに就いては、支那人の「宗教觀」なる部分に於いて述べるが、支那歴代の史實の記録を以つて、その儘支那の實狀と解することは、大なる危険である。

支那人の議論、乃至文章を見るに、如何にも大義名分に透徹し、愛國心に、燃えて居るかに見えるが、その裏面には、彼等個々の個人的利害とか、賣名觀とか、打算的原因やら、動機が多分に働いて居るものであつて、表面の美化を以つて、直ちにこれをその儘受入れるのは、支那では、夥しく考へものである。

認識と尺度

つぎに間違ひ易いことは、儒教に對する日本人の違算である。

由來日本人は、支那人を見るに「支那は孔孟の國なり」、「彼も人なり我も人なり」など、支那人を日本人扱にする癖がある。通例的に云へば、世界の道徳は、多くは共通的であるから、日本の道徳習慣を以つて、これを歐米人、インド人に適用することは、必らずしも誤りではない。併し我等の道徳觀念を以つて、直ちにこれを支那人に適用することだけは、偉大なる誤りである。私に云はせれば「支那人は人に遠く、寧ろ豚に近い」。彼等は仁義廉恥、忠孝なく、義務心なく、犠牲心なし。況んや人倫の道、五常の徳の如きは、四百餘州を探しても、藥にしたくもあるものではない。

日本人が支那を研究するに方りては、先づこの道徳觀念の根本から、その尺度寸法を改造して掛らねばならぬ。

また支那人は、増長限りなき民族である。「醜を得て蜀を望む」といふ諺があるが、支那人は、如何にしても、遠慮を知らぬ増長民族で、相手弱しと見れば、何處まで附け上るか分らない民族である。歐米人からは「チャイナ〜」と呼ばれ「メード・イン・チャイナ」で、別に異義なくやりながら、日本人に對しては「支那」と呼ばれることを忌避し「中華民國」と書かなければ、

公文書を受取らないなど云ふのは、そも〜日本の溫和政策を、馬鹿にして居るからである。

従つて支那の研究に遠慮は無用である。赤裸々に忌憚なく、その内幕をサラけ出して見ることによつてのみ、支那研究は可能である。

以上の諸點は、漢民族の研究上、必らず考へねばならぬ豫備知識を掲記したまでで、これだけで勿論足れりとする次第ではなく、またこれで主なるものを、盡して居る譯でもない。只單に支那研究上の手ほどきを、述べたものに過ぎない。

漢民族概観

シヤボン玉—多元的黄河の文明—世界の坳場—チヤイナ—領土觀念—

蠟燭の光—國家觀—社會文化

歴史的地位

日本と支那とは一衣帯水の國であるにも拘はらず、日本人ほど支那研究の不十分なるものは稀である。従來支那に關する幾多の研究、乃至文獻の如きも、歐米人間には相當多數にあるけれども、日本人の研究には、兎角十分でないのが多い。隣邦支那を研究するのに、出来てはつづれ、出来てはつづれるシヤボン玉の如き支那軍閥の興亡を、一喜一憂し、また革命戦や、内争や、南京事件や、排日や、經濟絶交等々、逐次遷り變る事件の根柢を究めずして、只單に目前の時局問題を論じ、支那の將來を議するの輩が、多數にあるが、四千年來培れたるその國民性と、社會狀態の實相、裏面は、實に複雑多岐であつて、これを追究し、その根本認識を確實にして、不變なる國民性を通じて、時局を論じ對策を論ずることが、支那では特に大切であり、その根柢を究めずして、風のまにまに動くところの枝葉末節を見て、徒らに對支策を論ずるが如きは、愚の骨頂である。

早い話が、隣人の性格を知らず、經歷も知らずして、これを批判し、これと親善するの、喧嘩をするのと云つて見たところで、所詮無駄なことである。萬人皆不可解とする隣邦支那を研究するには、先づその國民性を研究せねばならぬが、國民性は地理、歴史、習俗等の反映である。故に先づ支那を形成する主要民族たる漢民族の由來を、嚴に討究するの必要があるのである。

順序として、先づ上古以來の支那歷朝の變遷、日支交通關係等を、想起する必要があるが、それは専門の研究資料にゆづり、今その概要を摘記すれば、次ぎの通りである。

支那二十四朝興亡の跡を尋ぬるに、それは謂はゆる易世革命であつて「天下は天下の天下なり」との思想が、濃厚に動いて居る。然れば、金、遼、元、清の如く、異種民族が、中原を統治しても、彼等漢民族は、少しもこれを不思議とせず、三代以來、未だ曾て嚴密なる意味に於

ける支那全土の統一を見ず、世界即ち天下、天下即ち國土であつて、清末を除くの外、何れも
の時代に於いて、殆んど嚴密なる意味に於ける國境はなく、一、二の例外を除くの外、歷朝多
く豪族及び官僚の壓制政治であつて、治者と被治者とは、永久に分離して居る。これ等のこと
は、後述國民性の研究上に、留意すべき重要な事柄である。

支那文化の中心であつた黃河流域には、太古でも、夏以外に彭、磬、瓠等の幾多の種族があつ
て、比較的優秀なる漢民族の爲めに、抱擁同化されたけれども、漢民族そのものは、當時から
既に幾多の人種を合した多元的なもので、決して日本のやうな、純粹無瑕の單民族ではない。
周の如きは、習俗から言つても、確かに夏、殷とは異り、一説には、夏、殷、周は、同時に存
在したとさへも云はれて居る。

周の時代は、孔孟、儒教、老莊の哲學、孫吳の兵法等が出来た時代で、實に西曆紀元前五
百年、神武天皇の少しアトに、既に子曰はくや、社會主義共產主義があり、彼の蜿蜒五千支里に
互る長蛇の如き萬里の長城も、西曆紀元前二百年頃に、既に嚴存して居たのである。然れば漢
民族が、黃河の文明を自慢した火藥や、磁石、農耕、養蠶、または航海術等を以て、世界に自
慢するのも一理あることで、唐、宋時代の藝術に至りては、ギリシア、ローマの文化と遜色な
く、支那人が、古來中國と誇り、中華と自惚れ、日本人を、東洋鬼、歐米人を西洋鬼と言ふの
も、強ち無理からぬこと、云はなければならぬ。

併しながらそれは、畢竟早熟した子供が、尋常小學校で優等生だつたことを思つて、老後を
も誇らうとするのと同じであり、またこれ等の誇り、是等の矜持が、やがて増長限りなき彼等
の民族性を造り上げたことにもなる。さらに仔細に、漢民族發展の跡を回顧すれば、その裏面
には、不健全なる社會組織と、塞外民族の間斷なき侵略とがあり、これが爲めに天爲の文弱民
族漢族は、歪み歪んで、卑屈に枉げられた點が多く、支那人一流の歪み根性の起因ともなつて
居るやうに、見受けられる。

漢民族は、今から五千年前、支那の西域より中原に進出して、黃河流域に擴まつて居たと、
歴史は語つて居る。そして彼等は、自ら文明人を以つて任じ、先住民族を視るに、蠻夷と稱し
て、自惚れて居たものであるが、これは甚だ迷惑至極な自惚れで、世界の有らゆる文明は、我
々漢民族の發明にかゝると、今日尙ほ威張つて居るのであるから、呆れたものである。火藥の

發明、小銃の製造は素より、近代文明機械のタンク、飛行機の如きものまで、我々が往昔に於いて、既に早く創始發明したのだと、平然と天下に向つて自惚れて居る。但し感心なことには、ラヂオや、無線も、オレが發明したとは云はない。

斯くて四方より、黃河流域に進出した漢民族は、逐次先住弱小民族を驅逐して、漸次膨大を加へて行つた。壓迫された先住民族で今尙残つて居るのは澤山ある。例へば南方福建、廣西及雲南の一部地方に、住居して居る苗族がある。苗族は、元來漢民族と、その性格を異にして居る。一例を以つて云へば、漢民族は、直接武器を取つて、殺人を行ふよりも、好んで暗殺毒殺をするが、苗族は、勇敢に、明殺を敢行するなど、恰かも日本人の性格に似たところがある。今日苗族中からも、錚々たる人物が、随分多く輩出して居り、岑春煊などもその一人だといふことである。苗族の外に、會ては吳、越地方(上海附近)に、吳族などがあつたけれども、これも多く南方に壓迫されて終つた。

さて一度中原に逃出した漢民族は、四隣皆蠻族にして、我のみ文明人なりとは自惚れながらも、彼等が賤稱するところの蠻族からは、絶えず武力的壓迫を加へられて居たのは、奇觀である。すなはち東北方には蒙古人あり、滿洲人あり、南方には苗族あり、西方にはキルギス人ありと云つた始末であるのに、醜陋なる漢民族は、これ等の諸民族の武力的壓迫に對して、斷然兵器を取つて戦ふの勇氣はなく、只口先ばかりでワメき立てるに過ぎなかつた。丁度虜められた弱虫共が、ガヤ／＼口先ばかりで我鳴り立てるに等しいが、斯る無氣力な人種が、次第に卑屈になり、陰險な性格となつて行つたのは、當然なことだとも云へる。

漢民族は、これ等の蠻族によつて、間斷なく中原を犯され、征服されて居たが、約二千年前ほど前、秦は終に中原に國を成して、漢族に向つて君臨することになつた。秦は、北方の蠻族である。秦が天下を取るや、自ら萬里の長城を修築して、北方よりの蠻族の侵入を、防いだことは有名であるが、秦自身が、北方より進出した異民族でありながら、更に北方に長城を築いたのは、不思議なやうに思はれるが、實は不思議でも何んでもない。何となれば中原に進出した匈奴族が、漢民族の文化に感染して、漸次骨無しになつて行つたことの證左に過ぎないからである。

爾來隋、唐の末年頃より金、遼の侵入となり、宋末以後、蒙古民族が侵入して元の世となり、

滿洲民族の進出は清の世となつて、幾度か變遷したのであるが、最近漢民族を壓迫せんとするものは、依然蒙古の邊境に進出して來得べき北方民族だとも云へる。斯の如く、幾代かの支配民族は、北方から侵入したが、何れも漢民族の文化を呼吸するに及んで、何時しか軟化し、腐敗して、漢民族に同化されて終つたのである。誠に漢民族こそ不思議な存在である。或る人がこれを評して、漢民族は坩堝なりと云つた。正に適評なりと云ふべきである。有らゆる民族を融解同化する恐るべき坩堝である。

支那地理の概要

歴史的研究は、本書の目的ではないから、これ位として置いて、さらに地理方面を、概説して本文に入ることにする。

(一) 支那の名稱 起源は種々あるも、秦時代の名稱 *Chin* が轉化して *China* チャイナ、或は支那等となつたと云ふ説が、有力である。またロシア語の支那音キタイは、契丹から轉化したとも云はれて居る。

(二) 面積 支那本土だけで約百五十萬方マイル。邊疆を合すれば四百三十萬方マイルで、歐洲大陸よりも廣く、日本の約二十六倍、四川一省だけでも、人口八千萬。日本より遙に大とせられて居る。

(三) 人口約四億 世界人口の四分の一と云はれて居るが、詳細なる統計は不明である。密度は、山東が最大で七百人、廣西が七十人、蒙古、新疆二人、支那本土平均二百七十人。

(四) 人種 漢滿蒙回藏五族と呼んで居るが、西藏、外蒙古及び滿洲は人種的にも、これを支那の領土と、看做すべきや否や、疑問である。民族的に云へば、漢民族は三億七、八千萬を占めて、支那本土の代表的人種である。滿洲民族は二、三百萬と稱せらるゝが、支那本土に於けるものは、殆んど漢人に同化せられて居る。蒙古人は、三百萬内外を有するも、その分布は廣範圍に互つて居り、種族もまた多様である。回教徒は甘肅、新疆地方より雲南、陝西、河南等その他迄各各地に分布し、豚を喰はず、また宗教上の信念篤く、團結また固し。人口千五百萬乃至二千萬を有すと云はれて居るが、單一民族ではない。西藏民族は約七百萬と稱せられ、喇嘛教を奉じ、言語風俗、漢民族と異なる。但し以上の數字は、必ずしも確實なものとは云へない。こ

の外に雲南、貴州地方には苗族あり、その他邊疆地方には、漢土の前住民族である幾多の民族が、混血して居るので、支那人を研究するには、漢民族だけを研究したのでは、十分ではない。

(五)地勢 南船北馬の語に漏れず、揚子江流域を境として、南北の地形、人心、風俗にも、多大の差異がある。殊に南方兩廣地方は、住民の性質、氣風等も、支那本土の漢人と著しく異なる點がある。併しながらこの廣大なる土地と、大陸的氣候の自然が與へたる感化は、支那本土の民心をして、悠久、寛容の氣風を召來せしめたことは争はれない。土地が廣大で大陸的であること、言語風俗習慣の差異は、南北支那を一括して、支那と呼ぶよりも、各省毎に、これを一箇の獨立地方と看做すのが、寧ろ至當なやうに思はれる場合がある。

漢民族の特質

(一)領土觀念 元來支那人には領土觀念、言葉を換へて言へば、國家觀念なんて云ふものは有り得ない。天下といふ言葉がある。天下はこれ權力の及ぶところ、すなはち彼等の天下である。權力の及ばざるところ、支那人はこれを化外の地と考へて居る。滿洲、蒙古の土地は、支那から云へば化外の土地である。化外の土地を扱ふのに、何も遠慮などをする必要はない譯である。斯くの如く支那の政治は、蠟燭の光の及ぶところ、即ち所謂天下であり、領土であり、政治である。だから蠟燭の光の及ばざる邊境は勝手たるべきで、現にロシアは、蠟燭の光の及ばざる蒙古の境界に、隈なく哨兵を配置して、ドシ／＼進出して居るではないか。北にこのロシアあり、西に英國の西藏ありといふ有様で、遺憾ながら、蠟燭の光の及ばざるところ、また政治なきの状態を暴露して居る。

漢民族の矜持とする文化優越感と、長城を越えて侵入する塞外民族の武力侵略とは、文弱の民、漢民族をして、卑屈なる自己満足によつて、一時を誤魔化すことにのみ關心させ、爲めに猜疑心を養ひ、陰險なる習俗を、養成するに至つたが、これ等の侵略者に對する優越感より、却つて侵略者を屬國扱をし、屬國と考へて喜んで居るなど、支那人の領土觀念は、一寸一般と違つたところがある。

彼等の所謂領土とは、統治權の及ぶところを稱するのではなく、自分と交通往來のある一切のものを領土と稱し、自分の部下と考へるのであつて、つまり蠟燭の光の及ぶところすなはち

我が天下國家なりと、泰然として考へて居る。近來外國との往來頻繁となれる爲め、この蠟燭の火光の及ぶ範圍を段々縮小せられ、そこで已むを得ず、ロシアや英國を相手として、國境を劃定せなければならぬ仕儀に立到つたが、これは眞に已むを得ずして、こゝに及んだもので、彼等本來の觀念では斷じてない。

(二) 國家觀念 「支那は國家に非ず」との説をなす人が、屢々あるが、全くその通りであり、これを内部的に解釋して見ると、支那は、到底近代國家の組織を有して得るものでないことが分る。或る學者は、支那は人間の一大グループであり、社會ではあるが、國ではないと稱して居るが、全く其通りである。つまり支那に取つては、國家なる名稱は、諸外國との國際條約等を定める爲めに、已むことを得ず、押しつけられた名稱であり、支那人の考からすれば、狹量なる國境主義や、領土的國家觀念を超越して、國家、君主などを問題にして居ないのである。これは政治の要道は、税を徴せないことであり、治者は關せず、被治者は與らずと云うて、これを彼等の政治の根本的觀念として居るのも分ることである。

漢民族は、口と腹とは表裏相異なり、口舌の反覆常なく、多面體的の頗る複雑なる心理の持主であり、到底我々の心理を以つては、推察出来ない民族である。彼等が時と場合により、幾多の異つた心理状態を發揮する原因は、以上述べたことの外、次項以下に述べるやうな家族制度の害、統治者の無力、社會組織の缺陷等も、また大なる原因となつて居ることを、見道がしてはならない。

(三) 社會文化 支那文化は、最近まで未だ太古文明の範圍を脱せず、家庭工業と、徒弟制度の經濟組織であつた。従つて最近西歐文明の輸入により、急速に工場や、會社が出来て、經濟的變革を召來せしめんと、努力して居るけれども、マダ／＼近代文明の範圍に轉化するには、幾多の難關が横たはつて居る。

支那は、最近五十年前までは全く手工業のみの國で、會社や、銀行や、鐵道工場等の工業の如きものは、主として團匪事件後に於いて、發達したものである。初めて吳淞上海間に、汽車がレールの上を走つた頃は、ヤレ魔物だとか、或は怪物だとか唱へて、それに向つて投石し、或はレールの破壊を企てるなどのことを、盛んに遣つたものである。それは今から僅か四十餘年前に過ぎない。支那ではストライキとか、諸種の労働運動の如きものも、極く最近十數年より

起つた現象であつて、かゝる團體的運動を以つて、今日の支那人を、統制あり、團結ありと觀察することは、間違つた話である。眞實の支那人を觀察しようとするならば、その手工業組織下に於ける家庭工業、徒弟制度方面の舊式支那より、先づ以つて觀察せなければ、その眞諦は分らない。

支那を禍する家族制度

善妻と陰險—同種團結—食客三千人—質屋と骨董屋

諺に「氏より育ち」と云ふことがあるが、支那人の國民性を觀察するには、その因つて來るところを窺つて見るのが、特に必要であると思ふ。支那は、大家族制度の國である。古來姓氏族裔の維持保存を、八釜しく云はれた關係もあらうが、同族の結合は鞏固であり、家々には、各々族長があつて、族長は一切資産を管理すると共に、一切の家族も、皆その権力下に擁護せられて居るのが多い。換言すれば、私が家長だとすると、一切の財産家族は、私の管下に屬する。その代り妻子兄弟は勿論、叔父、叔母、弟の妻、妾からその子に至るまで、生きとし生ける者は、皆その管轄扶養を受ける譯であるから、依頼心と、無自覺とが、この間に培はれるのも自然である。また一方支那人の習慣として、血族の斷絶を嫌ふ關係から、妾を蓄へる習慣があるが、金持になると、三人も、五人も、七人もの妾を蓄へ、それが皆同じ一家の中に、正妻な

ど、同棲し、その妾には、夫れくの召使、子供、乃至は食客までも居るのであるから、一族は、一寸したところでも三十人、五十人になる。これ等の妻や、妾が、御互に鎬を削り、裏面の暗闘に、日もこれ足りない有様になるのは、當然の次第であらう。支那人が陰險、残忍であるとか、且つ陰謀性に富み、毒殺とか、詐謀姦惡等各種不道德の多いのも、起りはこの邊からである。

一夫多妻で、一家の中に多くの妻妾同居し、これ等の妾が、それ／＼多くの子供を生む。子供同志は、何の關係もないので、盛んに相排斥する。妻妾は、黨中黨を建て、召使まで黨同伐異、裏面の暗闘をやる。これ等の反面には、またお互に子供同志夫婦になるものもあるし、妾の子供と、他の妾とが姦通したり、家族の某と、妾とが通ずるとか云ふやうな、陰險奸惡絶え間なしである。大きな一家になると、このやうな人間が、百人も、五十人も、同居するものがあるが、斯うなると自然相互ひに葛藤を生じ、相排斥の結果は、陰險極まる性格となり、中傷離間讒訴を事とし、終には人を殺すのやら、殺人をせざるまでも、毒藥を盛ると云ふやうな手段を取るに至るので、これが今日の支那人の性格の半面を作り上げて終つたとも云へる。斯くして残忍にして陰險な性格は、この家族制度から發生した最大の産物であり、この複雑な家庭的環境から培かはれた、根柢深きものである。

さらに支那人には、同族、同郷、同學、或は同業者なるもの、相團結する習慣が、生れて居る。同族は、血縁團體として、同郷者は地縁團體として、その外に同業團體やら、職業團體やら、社會的に、この種同種類のもものが相聯合して、團結する習慣がある。これは支那のやうな、國家の統治力の弱い國では、一族一村の自衛上からも、この種の團結が必要となるのであるが、その結果は、頗る變挺なものとなる。例へば私が、假りに知事になるとか、或は他の役人になつたとすると、そこへ先づ一族相携へて、中には妻妾迄も召し連れた食客が、押しかけて来る。同郷者は、同郷者で、何とか云ふ名目で訪ねて来る。同期生は、同期生で、同學であるとか、同校出身であるとか、種々なる口實で訪ねて来ると云ふことになる。ところで支那人の習慣として、この種の食客を、一月でも、二月でも、快よく置いて、敢て嫌な顔もしない。これは慣例上然うする迄であり、また、面上然う努める點もあるが、兎も角大變なことになる。従つて孟嘗君の謂はゆる「食客三千人」の如きも、必らずしも法螺ばかりではなかつたと思はれる。

支那の社會制度が、右のやうな有様であるから、家長、族長になる者は、自然多額の經費を必要とし、妾を連れて食客に来る次男坊、三男坊から、その下女、下男までも養つて遣らなければならぬのであるから、その經費たるや、また到底少しでは濟むべき筈がない。

日本あたりに留學した新進の若者が、非常な意氣と、決心とを以つて、心切に青雲の志を抱いて歸郷するのであるが、一度郷里に入れば、右のやうな家族關係から、有象無象を、一切自分の手に引受けねばならぬ。廉潔政治を謳歌して、回天の意氣を以つて、官途に就いた新青年も、この寡團氣の中では、トウ／＼已むを得ず、やはり金錢慾の爲めに、働かねばならぬ破目になり、やがてそれが收賄となり、不正事件となり、金錢に餘念なきに至るのも、また已むを得ないことではないか。

私に一人の友人が居る。彼れは聯隊長であつた。位は陸軍の少將、月給は三百圓である。彼れは日本留學時代に、相思の仲となつた日本娘と、支那の家族制度から押付けられた第一婦人と、第二、第三、第四婦人を持つて居た。これ等夫人との間に出來た子供が、大小合せて十七人、その子供等に、一人々々の丫頭、すなはち召使と、外に門番、馬夫、掃除苦力、コック及びこれ等の妻子まで合せると、如何に少く見積つても、一族五十餘人である。これだけの人間の衣食を預かつて居たのでは、月三百圓では到底足らう筈がない。そこで已むを得ず、悪いとは知りながら、月々官金をゴマ化したり、部下の頭を刎ねたり、乃至はヘソクリで以つて、別に何等かの商賣でも、兼業せなければならぬことになる。「これでは私が貪官汚吏たるも、また已むを得ないでせう」と、ツク／＼彼れは、私に述べたことがある。

支那人はよく初對面に際し「アナタは何商賣ですか」と聞くが、イヤ私は官吏でこれ／＼だと云ふと、「それは知つて居るが、御商賣は何ですか」と聞き返へす。「官吏や、公吏に、商賣がある譯はないではないか」と云ふと、彼は如何にも不思議さうに、腑に落ちない顔をして、支那では將軍でも質屋をやり、知事が、骨董屋や、女郎屋を經營するのが、當然だと返答する。斯くの如くにして、家族制度そのものは、必らずしも悪いことではないとして、支那に於いては、その弊害の趨くところ、腐敗の種因が、こゝに蒔かれることを、如何とも爲し難い。

以上述べたことは、家族制度の不良なる反面のみを、記述したのであつて、五世、六世にも及ぶ百何十人かの大家族同居も、珍らしくないのみならず、實に一糸紊れず、感心させられる

のも少なくはない。この家長が、絶対の権利を持つて居り、各人は、金を得ても、勝手に使はず、共有財産として、一家の生活に當て、一家中誰彼と云はず、良く扶け合つて、誰れの子と云はず、泣いて居れば乳もやり、世話もしてやると云つた、誠に當然たる點もないではない。従つて支那では、一家の繁榮、一族の榮譽の爲め働くのが、固定せられた習慣となり、また従つて君恩、國恩よりも、先づ以つて家門の爲めを考へる。その代り一人悪ければ、一族が誅せらるゝ。即ち罪九族に及ぶと云ふことなども、珍らしくない。只こゝでは家族制度の内容を、詳述するのが、目的ではないから、これは省略して、唯家族制度が齎らしつゝある悪い一面のみを述べて置く。

統治者と被治者

官吏不要—良政は無爲—賢官と換地—軍用金—彭法師
と金だけ—荷厄介な政府

支那二十四朝の歴史は、易世革命の歴史であることは、前に述べた通りであるが、そもく支那人が、官吏になり、政治家になるは、何の爲めかと云ふに、それは天下國家を治めんが爲めでなくて、一に金を儲けんが爲めである。支那では、治者と被治者とは、判然區別せられて、永久に一致することのない、別な軌道を、歩いて居るのであるが、その内治者は、如何にして民衆から金を搾り、如何にして金を儲けるべきかを考へるのみで、治めらるゝ者の利害なんかは、全く問題にして居ない。「依らしむべく、知らしむべからず」とは、支那の封建制度時代から、今日まで終始一貫、奉じて易らざるところの統治者の鐵則である。

支那人には國家觀念がない。否、國家觀念がないのみならず、被治者は、一種の無政府主義者である。勿論歐米諸國に於けるアナキストとは異なるけれども「官吏と、土匪と、警察と

が無くて、法律や、租税が、無かつたならば、何んなに有難いことだらうか」と思ふのが、支那四億の庶民の考へ方である。貪慾なる官吏と、残忍なる土匪とは、共に何時でも人民に對する加害者である。だから人民共は、常に斯んな者が無かつたら、何んなに善いだらうかと思ふのである。「政家不顧蒼生之計、蒼生不顧天下之策」と云ひ、また「日出で、耕し、日暮れて寝ぬ、井を掘りて飲み、田を耕して喰ふ、帝力我に何か有らん」とも云ふ。支那人の腹の中を斷ち割つて見れば、古今を通じてこの觀念が濃厚である。また昔から政治の要道は「無爲にして化す」「良政は徴税せず」「無政が最良の政治である」と云はれて居り、民衆に拘束を加へず、租税を徴せず、時にモラトリウム、すなはち徳政を發して、弱民を救済するなど、政道の簡易が、一番の善政とされて居る。

従つて支那では、煙草でも、鹽でも、關稅でも、その種類が間接税たる消費税である限り、イクラ高くなつても、人民は平氣であり、餘り高價になれば、下級品で我慢するだけのことと、この邊極めて柔軟性に富んで居る。ところがこれが直接税、すなはち個人割宛の税金になると、俄然形勢が一轉する。直接税になると、少しでもこれを徴集することは、民衆の頗る喜ばざる

ところである。

支那人が官吏になるのは、前云つた通り、金儲けの爲めであり、蓄財の爲めであり、従つて自己本位であることに於ては、實に徹底したものである。従つて人民の實狀を能く心得て居て、巧みに誅求の方法を考へ、裏面的に、民衆から金を搾ることに掛けては、實に讚嘆すべきものがあり、また徴税も多く請負賄で、何縣から幾何、何村が幾何と、何等かの名目で搾り取る爲め、人民は極度に税金をイヤがるのである。試みに官吏の悪行方面を素破抜くと、昔から支那では、何縣の知事は一萬圓、何町の警察署長は三千圓、某地郵便局長は二千圓とか、云つた工合に、官吏の株や、價格が決まつて居る。今でも尙ほこの種類の賣官制度が、窶かに行なはれ、官吏になりたいものは、何千圓か出して、窶かに前任者の地位を買ひ取り、人民から、成るべく多く税金を取り立て、成るべく早く、代金の回収をやるのである。

清朝時代には、一省の官吏を、同一の土地に固定させない爲め、換地の法を行なつたが、これ等の制度は勢ひ、官吏として、年限と、時間の許す限り、成るべく速やかに貪り得るだけの金を、搾り取る習慣を、養なはしめたものである。官吏の態度が、斯ういふ工合であるのに搦

て、加へて、人民の保護に任ずべき軍隊も、警察も、また何とか口實を設けて、人民の懐を掉ることに餘念がない。支那で喧嘩をして、警察にでも訴へようものならば、金持は金持なりに、貧乏人は貧乏人なりに、何とか口實を設けて原告、被告両方面より、幾何かの金をセシめない限りは、到底結末をつけて呉れないのが常であり、何の爲めに警察に訴へたのか、全く分らなくなるのが通則である。これは明らかに、喧嘩兩成敗と云ふべきであらう。

また國家の保護に任ずべき軍隊は、別に國家の保護などは遣らぬ。お互に内亂に没頭するのはマダしも、何とか口實を設けて、住民地の傍に陣營を張り、今にも戦争が起りさうな様子をする。ソコで自分の街の傍で、戦争をされては困るから、何とか戦さを止めて貰ふやうに、商務總會邊りから懇願をするけれど、幾何かの軍用金を奉納せない限りは、何んなに言うても止めるものではない。仕方がないので、十萬なり、二十萬圓なりの軍用金を整へて、御願ひに上ると、こゝで始めて「我良民を塗炭に苦しむるに忍びず」とか、何とか、尤もらしい世間への口實を設けて、また次ぎの村に行く。だから何のことはない、軍隊は、銃を持ったユスリの團體である。

斯くの如く官吏は駄目、兵隊も駄目だとすると、民衆は諦めよく、自分で自己を防禦するか、土匪にでも、保護を頼むの外ないのである。支那の土匪は、一定の地域に繩張を持つて居て、それ／＼の村から冥加金を徴集して、その代りに、これ等の村は決して荒さないと云つた仕組みのものが、澤山ある。だから官吏よりか、軍隊よりか、土匪の方が、村人には有難いのである。その外自己防衛の爲めには、村々には自衛團なるものがあり、これは金を出して村に護衛兵を養つて居る組織である。また間断なき官吏の壓迫に對抗する爲め、自然に同業者、同郷者が、相團結して自己防禦をやることとなる。各地にある山西會館、廣東會館とか、山東同郷會、錢業公會とか、青幫、紅幫と云ふやうなものも、それ／＼この種團結の現れに外ならぬ。

統治者が、無力であり、不誠實であり、それで自己以外には、何物も頼ることの出来ない民衆は、その複雑なる家庭生活の中に於いても、また同様であつて、親も頼りにならず、妻も、子も、アテにならない。お互ひが疑ひ合ひ、ヒガみ合つて生きて行くと云ふことになる。誠に氣の毒な話で、彼等支那人としては、自己と、生死を共にするものは、只影法師と、お金だけであるから、金なるかな、金なるかなと考へ、金と心中する支那人、金故には何んな屈辱も、

意とせない支那人が、少なくないのも、また無理からぬことであり、支那人が、利己主義になるのも、自然であると云はなければならぬ。

これを要するに、支那には政治はないのである。従つて政府もないのである。然して官憲は、會社、銀行と同様單なる利殖機關、金融機關であるのである。彼等は如何にして、最も多くを民から搾り取るか、これ以外に考へて居ることはないのである。そこで反對に被治者であるところの國民は、オレが儲けた金で、オレが暮して居るのに、何で治者の必要があるかと、考へることになる。治者、被治者の頭が、斯んなである以上、全く以つて、政府もなければ、政治も何にもなく、また政府も、政治の必要もない譯である。卑近な實例を挙げると、こゝに盜難があつたとする。そこでこれを届け出ると、届けた奴を、警察は却つて拘禁する。泥棒の這入るやうにしたお前が、第一悪いと言ふ理窟である。そして取られた本人から、五圓か、拾圓の袖の下を取つて追ひ歸へす。萬事が斯うであるから、良民は、泥棒に取られ、警察に取られると云ふのだから、誰れも警察などを相手にせぬやうになる。つまり政府は、民衆に取つて荷厄介な存在なのである。

國家組織と社會組織

支那は國家にあらず—自警團—非法治國—我利我慾—散砂

端的に云へば、支那は國家ではなく、民衆の寄り集まつた一つの社會に過ぎない。民衆は、多年無慈悲なる統治者によつて、苛められ、搾取せられ、そして然かも年々北方の塞外民族からは、迫害を受けて來て、ツク／＼政府の腑甲斐ないのを、熟知すること、こゝに四千年。政府が、自分達の實生活に、寄與するところのないことを、ツク／＼知つて居る。従つて彼等は、自ら自己を保衛するのに急であつて、また他人をアテにしない。加ふるに支那の社會的實況と、民衆の間に行はれて居る利己本位の宗教的觀念とは、人の爲めに奉ずる義務犠牲の觀念から遠ざかつて、極度に、自己防衛のみに専念するやうな状態となり、これ等の思潮は、相率ひて國家否認の思想となり、統治者を呪ふ心理となる。殊に歴代の政府は、何等かの名目で、金錢を徵集し、税金を横領し、權力を笠に著て、賄賂をフンだくるし、さらに軍隊は、その上に民衆

を、武力を以つて搾取する。ところが人民も、また斯んなことには諦めが善く、天災、水災の外避け得られないものに、兵災と云ふやうなところで、安心立命して居る。兵災と云ふのは、兵亂や、掠奪やらのことである。内亂の度ごとに、今年**は兵災だからとて、没法子**（仕方がない）と諦めると云ふのが、支那人である。

爲政者、軍隊に對する人民の觀念は、斯の如くであるから、その結果勢ひ自衛の團結たる自治の社會が出来、自存自立の集團が出来て、利害相通する一村一族、または同一業者が、一つの結社結合を形成することになること、上述の如しである。

話が少し横道にソレたが、上に述べたところだけでも「支那は社會ではあるが、國家の形態を備へて居ない」と云ふ命題が、成立つことが分らう。

前にも述べた如く、この國民には、國家思想と云ふものがない。また従つて國境觀念がないのみならず、國內の政治も、亂脈なる場合が多い。彼等は自からを、中華國など云つて、威張つて居るけれども、實際のところは成つて居ない。例へば、清末の革命以來こゝに二十二年に於ても、その謂ふところの統治の内容を見たならば、法律制度は整はず、内治は擧らず、さらに警察でも、刑務所でも、官吏の服務でも、有らゆる方面に於て、國家の實質を備へたものが一もないと云つてよい位である。孫文出で、三民主義、五憲憲法などと、一廉心得たやうなことを云うたけれども、總てこれ口頭禪。官吏の搾取上の新看板に利用された外、何等の實質もないと云ふのが、遺憾ながら事實である。斯くして支那は、依然として四千年來の鄉村政治であると云ふのが、適評であり、少なくとも近代的國家組織の要件を、備へて居るとは云へない。すなはち表面的にも、實質的にも、世界稀れに見るの非法治國である。

支那を斯くならしめた原因の一つは、この國民の極度の融通性、御都合主義にある。彼等は、外國を眞似て憲法を作り、法律を發布し、商法、民法を公告して居るが、一度その制度の運用を直視したならば、全くアキレ返る。例へば司法制度の内幕を窺つて見よ。その裁判が、如何なる事を爲しつゝあるか。その刑務所が、如何なる状態にあるか。統治者は、無裁判で以つて、死刑やら、首切りを、今尙ほ平然として行ひ、青龍刀を以つてする野蠻なる首切りと、街上の晒首とが、今尙ほ公然と行なはれつゝあるのである。重ねて云ふ。彼等は御都合主義である。さらに禪學者でもある。故に二と二を加へて、五にもなれば、その時の風向き次第で、三にも

なること位は、平氣の平左である。従つて刑法でも、民法でも、その時の賄賂と袖の下次第、彼等の風向き次第で、如何やうにも變更し得るのである。彼等は端的に云へば、法的無責任者なのである。

それにも拘らず、彼等が、國權とか、愛國とか、八釜しく云ふのは、彼等の對外、對内上の一種の體面からであつて、外國に對する必要上からのみ、國家と云ふことを意識するけれども、支那人なるものは、煎じつめたところ、個人以外には、何もものない民族である。だから支那人の用ふる國家とか、國民とか、愛國とか、國權とか、國益、國境などの言葉は、悉く「國」の字を取去つて、「我」と云ふ字を、置き換へるべきものであり、然うすれば意味が極めて明瞭になつて来る。また従つて愛國とか、利權回收とか云ふものは、名前は堂々として居るけれども、所詮は我利、我慾を遂げるまでの賣名的看板に過ぎざる場合が、頗る多い。

支那人の統治觀念は、前にも述べたやうに、國威の及ぶところ、すなはち天下である。「天下は天下の天下である」との觀念が濃厚である。すなはち蠟燭の火光の及ぶところが、天下なのである。従つて國境觀念などは、極めてアヤフヤであり、この民族は、何處まで超國家的の民族であるか、分らない一種のコスモポリタンであると云ふ、強い印象を受ける。國民教育などと云ふものも據るべき根據はなく、孔孟の教のやうなものでも、爲政者の便宜主義から、利用せられて居たに過ぎないし、社會主義、共產主義の如きも、早く四千年の昔から、唱へられ、考へられて來たと云ふ國柄である。かるが故に彼等に取つては、國家組織など云ふものは、他人の著て居るオーヴァ・コート見たやうなもので、彼れに何等の實在と、利害があるものではないと云ふのは、當然以上の當然でなければならぬ。

これを要するに、漢民族は、謎の民族である。ユデア民族と共に、世界に於ける最も頽廢したる、然かも社會的、民族的には、永久不滅の民族である。

支那人は、能く我等に向つて云ふ。「我々はアナタ方よりも、數百年だけ、文化が進んで居る。だからモウ二、三百年も経てば、歐米人もアヘンも吸ひ、麻雀もやる、賄賂も取ると云ふことになる。さらに五、六百年もすれば、日本人も、我々と同じ程度の個人主義となり、パチでも、毒殺でも、アヘンや、モヒでも、朝飯前になる」と。これは彼等の眞實なる半面を遺憾なく發揮するところのエピソードである。つまり支那人は、散砂の如き民族である。水か、

セメントか、強力な媒介者があれば、團結し得るが、一度強力のタガを取去れば、砂は何處までも砂である。個人として、良好なる勤勉家であり、個々の砂は、堅實そのものであつて、永久に不滅であるが、他力なくしては、國家組織などの出来る國民ではない。再言するが、支那は、國家ではない、社會である。或は民衆の集團村である。

匪賊の國

兵匪—土匪—學匪—中華匪國

支那は、古來匪賊の國である。兵匪(官匪)、土匪、學匪、政匪、これ等のものは、昔から支那に横行する名物であつて、支那の民族性に及ぼす影響が、少なくない。

兵匪とは、云ふまでもなく軍隊のことである。支那の軍隊は、元來土匪、浮浪人、乞食の集りである。漢の武帝の時には、死刑囚、亡命者、浮浪人、有罪の官吏を以つて、兵と爲したと云ふことがある。唐の五代には、兵の逃亡を防ぐ爲めに、入墨をしたが、それが却つて入墨をされた者は、悪者であるとの代表語になつた。支那では「好鐵不打釘、好人不當兵」(好い鐵は釘にしない、好い人は兵にならぬ)と言ふ言葉があるが、兵匪は、すなはちゴロツキの寄り集りであるから、然う云ふのである。

支那の或る地方では、兵のことを丘八チヤウパと云ふが、これは支那語の惡口「王八」(馬鹿野郎)といふことを、モチつて使ふものである。四川の或る地方では「棒客」(鐵砲を昇いだ御客など

目ふ意味に使はれる」と呼んで居るが、これなども、兵に對する侮辱の言葉である。兵は斯やつに嫌はれものであるが、これは支那には、國を護る爲めの國軍は、事實上一兵もなくて、却つて兵は、内亂と、利權爭奪と、私利私慾を肥やす爲めの道具に、使用せらるゝからであつて、支那軍は私兵、すなはち兵匪である。

次ぎは土匪、すなはち馬賊、匪賊である。浮浪人は、兵隊になるか、然もなければ、土匪になるのが、支那の實情であり、軍隊でも、金を貰へなくなれば、直ぐに兵變を起したり、逃亡して、土匪に變つて終ふ。だから軍隊は、土匪の收容所、土匪は反對に軍隊の出張所見たやうなものである。都合の善い時は兵になり、都合の悪い時は、土匪で稼ぎ、結局政府で養つて居る時は、軍隊と云ひ、自分で稼ぐ時は、土匪、匪賊と云ふだけの差しかない譯である。張作霖や、張宗昌が、土匪の親方であり、明朝や、清朝を拵らへた朱元璋や、愛親覺羅も、源を訊せば、皆土匪である。「王侯將相豈種子あらんや」で、土龍も風雲に乗ずれば、昇天して天下を支配するのが、支那である。また支那では、土匪と、軍隊とは、富者から金を取上げて、貧乏人に振りまく一つの社會的中间機關とも見得るので、無くてはならない一つの存在であるとも、云ひ得らるゝ。

つぎは學匪である。支那に、讀書階級と云ふのがある。昔から官吏は、出世の登龍門である。官吏になつて、タンマリ金儲けをせんが爲めに、經書を読み、學を習ふ。併し官界には、色々私情があつて、中々容易には官吏になれぬ。官吏にありつくことが出来なかつたものは、滔々相率ゐて、學匪になるのである。彼等の武器は言論であり、筆である。口に親日を唱へるものがあるれば、親英を唱へるものもある。國權回收を叫んで、日貨排斥や、愛國運動に聲をカラすものもあり、時の政府の稅政を擧げて、土匪と相結んで、國を奪はんと圖るものもある。皆これ學匪である。古來學匪は、歴世の統治者を困らせたもので、流石の秦の始皇帝も、これ等の學匪には腹を立て、これを坑にし、諸士橫議を禁じたが、これは適ま登龍の門に落第した學匪の災害をなすこと、古今無數であることを、反面から證明するものである。官吏となつて、我利を積まんとして、教育を受けたるものは學匪となり、學問もなく、官吏にはなれないものは、兵匪となり、土匪となつて、直接行動を採るだけで、匪たるに於いては、何れも同じことである。「官たるも安からず、匪たるも靖からず」と云ふ譯で、流離變轉の定めない支那に於い

ては、上は大總統から、下はボーイ、小僧に至るまで、手つ取早いところ皆匪であり、それが居る地位によつて、官匪、土匪、學匪と云つた工合に分れるだけで、何れも匪たるに於いて、擇ぶところが無い。大谷光瑞氏は、謂はゆる『中華民國にあらずして、中華匪國なり』と、斷案を下して居るが、全くその通りで、極端な悪口を云ふならば、支那をリードするものは、生きているが爲めに働らく土匪の集團であると、云ふことが出来る。

普通の日本人は、喧々騒々たる排日運動、愛國運動を見て、これは大變だと、喫驚するが、これは別に驚かんでも善い。あれは要するに學匪共の排日屋とか、愛國屋のする仕事である。彼等は、排日業が商賣であり、愛國業が本職なので、諸君が會社員であり、銀行員であるのと何等變りはなく、愛國屋、排日屋等は、所詮は餽屋のラツバ見たやうなものである。元來支那三億九千九百萬の庶民階級は、排日屋、愛國屋には無關心である。讀書階級、治者階級（別の名を學匪、政匪と云ふ）と、庶民階級とは、全然別な軌道を歩いて行くものであり、この兩者は最初からレールが違ふので、永久に異なる途に行くべき運命にある。インテリ階級は、餽屋のラツバを吹き、庶民階級は、イヤ／＼ながら、餽が欲しさに、このラツバに跟いて躍るのである。支那の實際を知らうとすれば、この餽屋のラツバに、惑はされてはならない。何となれば、あの八釜しいラツバ吹きの餽屋がなかつたら、自分達は、何んなに幸福であらうかと考へるのが、彼等庶民階級なのであるからである。彼等庶民階級は、自ら耕し、自ら勞働し、營々として努力し、郷村は郷村、錢業は錢業、小賣屋は小賣屋と、それ／＼の環境に應じて、自ら小社會を形成し、その上に國家も、統治者も、何も存在すべき必要を認めない。民衆は平穩に生存が出来、生命財産の保護をして呉れるものさへあれば、その英たると、米たると、將た元たると明、清たるとは、彼等の問ふところではないのである。だから支那は、國家にあらずと云ふので、嫌がる坊やに持著せて、先代萩の千松様で奉られるよりか、泥のついた餽玉でも、大きいのを一つ貰ふ方が、庶民の本當の喜びである。

支那人の宗教觀

儒教—敬天と天命說—仁義なく忠孝なし—醜惡の美化—陳平と漢王—頂門の一針—
佛教—現世を樂土—道教は現世教—一圓か五錢か—功過格—玉皇帝—莊子の無役無
用—老子の三寶—楊子の利己—墨子の兼愛

支那人の心的生活を司るものに儒教、道教、佛教がある。基督教、回々教、喇嘛教などもあ
るが、基督教以下のものは、餘り大なる關係がないから、儒、道、佛の三教に就いて概説しよ
う。

支那には孔子とか、孟子や老子とか、莊子とか、昔から有名な道學先生が澤山出て居る。こ
れは支那では、古來早くから、哲學的の發達が盛大であつた爲めであり、殊に周末には孔、孟、
老、莊、墨子、烈子など各派の哲學が、並び起ると云ふ盛況を、呈したのである。その後一進
一退はあつたが、支那は思想的には、比較的開化した國であつたことは、争ひ難き事實であ
る。

儒教の如きは、諸士横議、甲論乙駁、その發達が盛大で、爲めに秦の始皇帝の如きは、これ
をウルさがり、學者を坑にしたことさへあるが、漢から南北朝や、隋、唐、宋を通じて、爲政
者、讀書人の間に儒教は、大いに持てはやされたものである。また道教は、元來支那人の性格
に合した現世主義の教であるが、佛教の渡來以後、その刺戟を受けて、一層宗教化して來たの
みならず、今では殆く支那の上下に信頼せられて、世道人心の大半を、支配して居る感がある。
これに反して佛教は、何となく現世に遠ざかり、現金主義の支那人には、喜ばれず、寧ろ冷遇
されて居るやうに見える。要するに今では、佛像は骨董屋に葬られ、孔子廟には、蜘蛛の巣が
張つて、道教のみが、一般世俗に繁昌して居る觀がある。斯う云つた現象からも、支那人なる
ものゝ民族性は、推知され得るのである。

儒 教

儒教は、勸善懲惡の道德教であつて、孝道、敬天、人倫を喧しく云ふ。春秋の時代、孔子に
よつて大成され、爾來時の世俗救済の爲め利用せられたものである。周末春秋以來、多くは歴

代の爲政者に、治世の方便として推奨せられ、或は官吏採用の方式として、百家經書を喧しく云はれた爲め、學說としては、讀書人の間に相當普及しては居るが、世俗には餘り實行されては居らぬ。これは支那人のやうな現實觀念の強いものには、善惡を説き、道德を勧めた丈けでは、有難味も、功德もないので、欣ばれないのが、當然であるからである。唯その敬天思想と天命觀すなはち『何事も天の命なり』とする思想は、何處か支那人の氣に入るところがあると見て、今尙ほ残つて居る。支那人の能く使用する『沒法子』なる一語は、事件の終結と、斷念とを表示する最終の言葉であり、支那人の天命觀から出た諦めの言葉である。

日本に孔孟の教が輸入せられて以來、眞に儒教の眞髓を研究したものは、寧ろ日本である。日本人は、正直者で自分の道德觀念を以つて、直ちに人を類推する。従つて孔孟の教も、そのまま、研究し、文字のまま採用して、支那は仁義の國、忠孝の國なりと尊信したもので、荻生徂徠のやうな中華崇拜論者が出て來たのも、當然ではあるが、私に云はせれば、現代支那には仁義なし、忠孝なし、節婦なし、烈婦なし、忠信孝悌は口頭禪であり、偽物であると、云ひたいのである。また事實然うであり、支那二十四朝の歴史は、美化された醜惡の連続である。宋の將に亡びんとするや、二十四郡一人の義士もないかと、天子は地團駝を踏んで口惜しがつたではないか。清の將に亡びんとするや、大樓の倒るゝを支ふべき袁世凱は、却つて清室に讓位を迫つたではないか。何處に義があり、何處に忠があるか。尤も支那人にも、タマには支那人らしくない、出來損ひの支那人がないでもない。顔眞卿や、文天祥や、岳飛將軍や、南京で籠城した張勳の如きは、支那人としては、この點で畸形兒であり、出來損ひであり、支那人離れのした支那人であり、支那人の普通の考へから、飛び離れた存在である。この故を以つて、支那人の忠孝觀は、日本人のそれとは違ふ。個人主義に終始する支那人の忠は、身を犠牲にして、人に捧ぐるの忠ではない。自己の仕事に熱心なること、すなはち忠實の忠（まめやか）であること、後に述べる通りである。

支那では「孝は百行の基」と云ふけれども、併し支那人の孝行は、祖先に對する奉仕よりも、因果應報の觀念や、迷信から來る利己的の考へ方が多い。自己や、子孫の幸福を祈らんが爲め、自分の金錢を得んが爲めの祈願から來る孝であり、爲政者から、褒められんが爲めの孝子、節婦であることが甚だ多い。私が斯う云ふと、然らば支那に數多き節婦、烈婦の石碑は、何うし

たのかと云ふことになるかも知れぬが、裏面の實相は、随分ヒドいのである。支那の烈婦には、夫に死別しても、醜婦で手の出し手がなかつたからの烈婦であり、節婦であることが多く、中には夫の死後親戚、兄弟が、死者の妻を殉死せしめて、お上より節婦、烈婦の恩賞を受けんが爲めに、犠牲にするのやら、家庭的内争から、毒殺して置きながら、ワザ／＼殉死の届出をするものも、少くないのである。尙ほ前清時代の節婦の碑を見ると、それが多く官吏の婦女であるのも、一奇とすべしである。官吏の婦女を、下僚が、烈婦、節婦として上司に推薦したり、官吏の御機嫌を取る爲めに、土地の人民から、上司に表彰を請ふことは、前清時代に各所で行なはれた習慣であるから、斯の如く似而非なる烈婦、節婦が、發生した譯である。

支那の史實には、美化された歴史の裏がイクラでもある。某侯の死するや、三子互に位を譲り殯せざること三年、禪讓の極みと褒めて居るが、實は三子相争うて、殯葬し得なかつたのである。

齊の桓公は、死後六十七日、終に屍蟲口より出づるまで、五人の公子達は、相争うて父を葬らなかつたではないか。自己の利害の爲めには、孝道も、また顧みられないと云ふのが、實相である。

儒教で一番喧しく云はれた人倫五常の道が、不思議にも、孔孟の子孫たる漢民族から、喪なはれて居ることは、何と云ふ皮肉であらうか。支那を研究するには、その歴史が、美文を以つて粉飾せられ、醜惡を美化されて居ることを見逃がしてはならぬ。資治通鑑、十八史略、三國史、如何に我々日本人の頭に、美しく響いて居ることであるよ。併し一度支那の實情を知つて、再び支那史を繙いて見るならば、そこには見逃し得られない歴史の裏がある。十八史略に、漢の宰相となつた陳平が、賄賂を受けたのを責められたところがある。陳平が、友人魏無知の紹介で、漢王に見えて、都尉となつたが、内密に諸將の金を受く。漢王これを無知に責めたところ「王の問ふ所は行なり、臣の言ふ所は能なり。尾生、孝己の行ありと雖も、勝敗の數に益なくんば、何の用あらんや」と答へ、陳平は「臣裸身にして來る。金品を受けずんば、資となすべきなし。臣が計にして採るべきあらば、之を用ひよ。若し用ふべきなくんば、金は封じて官に輸し、骸骨を請はん」と答へて居る。實利一點張りで、袖の下を受けても、平然たるところに、昨今の支那人と、靈犀相通するものがあるではないか。

また齊の桓公に、鮑叔が、管仲を推薦する時に、管仲は、曾て桓公の莠の道を遮つて、これを射たことがあるので、鮑叔大いに仲を辯護する段がある。「仲曾て鮑叔と賈し、利を分つに、自ら厚うしたけれども、仲は貧乏だから、貪慾とは云へない。曾て三度戦つて、三度逃げたが、仲は老母があるから、卑怯とは云へない」と云うて居る。父母あるが故に、卑怯とは云へないと云うて、孝を、忠よりも重く見るところに、日本人と、道義觀を異にする、支那人の注目すべき點がある。

かつて桓公が、管仲に對し、群臣の中から、誰を宰相にしたら善いかと問答したとき、易牙は何うだらうかと云ふと、仲の曰く「子を殺して君にすゝめる、これは人情ではない」。然らば開方は如何。「親に倍いて、君に適ふ、人情にあらず」。然らば豎刁は如何。「自ら宮して君に適ふ、人情にあらず、共に近づくべからず」と答へたとある。日本人の眼から見れば、崇敬すべき忠道であつても、支那人はこれを人情にあらずと云ふところあたりは、日本人の忠孝に對する考へと、全く異なることが分る。つまり支那人の忠孝觀と、日本人の忠孝觀との相違が、ハッキリ分る譯である。然かもその間人情の機微に、處世の要領を巧みに挿入して、文章を以て、悪徳を美化されて居るのを見るであらう。支那の史實には、この種の例が澤山ある。

儒教の教訓は、要するに孝が第一ではあるが、忠を否認したのではない。然かも孟子は、匹夫紂を殺すを聞くも、未だ臣の君を弑するを聞かずと逃げて居るが、孟子様もナカ／＼ツルいところがある。

漢民族は歴代、北方蠻族から侵入せられては、負け戦をしながら、史實は常にこれを美文で、誤麗化して、北蠻が、支那に臣事したやうに書いて居る。支那歴史を研究するものゝ注意せねばならぬことであるが、また漢民族の虚言、虚偽に、平然たる性格と、負けても面子だけは、棄て切らない彼等の性格を、瞥見することが出来る。

孔孟の教は、實利主義の支那人には、確かに頂門の一針であるが、彼等支那人は、表面にこれを唱ふるも、裏面に毫も實行せないのみならず、却つてこれを悪用して居る。支那人の現金本位の我利々々思想に對しては、孔孟も随分時弊の矯正を喧しく云つたと見えて、孟子の如きも「上下交々利を征すれば國危し」とまで憤慨し、また梁の惠王に對して「義利の辯」を説いたこともある。董仲舒は、仁人は「其身を正うして、其利を計らず」と云つて居るが、支那人

には、斯んな仁人は居ないので、勿體ないことだが、孔孟の教は、多く儀禮用、他所行用、聯盟委員に供覽用となり終つた觀がある。

佛 教

支那の中世は、佛教全盛時代であつたけれども、佛教は彼等に取つては餘りに理想的である。「煩惱を滅却して、無我無心の涅槃に入る」と云ふやうなことは、餘りに哲學めいて、現實的な支那人の心理には合ひつこない。現世を苦界として、樂地を十萬億土の彼方に求むると云ふのは、餘りに現世から遠過ぎて、現金的な支那人には、解し難いことである。更に平たく云へば、佛法は、現世を苦界だと云ふけれども、支那人に云はせれば、出来ることなら、この世を樂土にしたい。情慾を抑へて、自我に執著しない位ならば、この世に生れた甲斐がない。佛教の極樂や、基督の天國は、あるものか、ないものか疑はしい。タトヒあつても、餘り待ち遠い。美しいこの世を捨て、死んで花見がなるものか。この世で情死して、來世で蓮の臺に相乗したところで、それは餘りにも馬鹿らしいことであると考へるのが、支那人である。だから末世の坊さん達は、流石に氣が利いて居つて、地獄極樂は、この世にあるのだと愚民を説き、現に四川の鄧都に行けば、地獄も、極樂もあると云ふことになつて居る。併し現金主義の支那人には、第一その四川省すら、遠過ぎて待ち切れぬ。地獄極樂は目前に欲しいので、その場で、すぐ因果應報があつて欲しいといふのが、支那人の本音である。享樂、受益の現代を離れて、そこには死も、哲學も、未來もないのが、支那人の本心なのである。儒教が形式に終つて、社會に實用されず、佛教が、迷信と邪教とに合流したのも、つまりはこの邊の消息から出たことである。「名僧は、豆腐の料理氣に入らず」と云つた趣きが、無いでもない。

道 教

道教は謂はゆる老、莊の教義が、多分に採納せられて、支那人に相應はしい教義となつたものである。道教の起原は、明らかでない。後漢の張道陵が、老子を昇ぎ出して、これを開祖に奉つたとか、何かと云ふこともあるが、要するに一種の通俗教として、恰く漢人種に喜ばれて居る。「我れ一毫を抜いて、天下を利する事あるも、敢て人の爲に之を爲さず」と云つた楊子の

獨善思潮は、道教の懐く教義の一つであつて、道教は、支那に於ける現實主義、實利主義に、最も徹底した教である。佛教のやうに、地獄極樂が、十萬億土の遠方にあつたりするのではなく、その場のことは、その場限りで、解決されるといふ點が、支那人の思想的慾求にも、能く一致して居るのである。

支那人が、道教を喜ぶ譯は、色々ある。道教には攝生の法と云ふものがある。不老不死の藥を飲んで、仙人になるとか、靜座長壽、人生を享樂するとか云ふことは、大變に喜ばれることで、これにも色々の祕術がある。性を享樂する、房中の術など、近代のエロ、グロに相應しい研究が、支那には、古くから進んで居るが、道教にも、チャンとこの祕術がある。また因果應報、一善を積めば、一過を償ふと云ふやうな、通俗的勸善生利の説もある。

以上のやうなことがウマク行なはるれば、肉體は、その儘不死の神仙となつて、鶴に乗つて神仙界に行けると云ふやうな迷信やら、色々な迷想などもあるが、善いことをすれば、この世で卽座に善報があるとか、今日遣つたことには、明日にも善果が來るとか、善根を施せば、支那人の希望する長壽、多福、多財、すなはち福祿壽が直ぐに報いられると云ふやうなことは、支那人の最も喜ぶことであるが、道教は、これ等の通俗的支那人心理を、巧みに捉へて居るところに、その長所がある。要するに道教は、老子、莊子の個人主義、自我主義を、その儘通俗的に取入れたもので、『明日の一回より、今日の五錢』が善いと云ふ、現世主義、實利主義が、その根本をなすものである。この邊のところは、如何にも能く支那人の嗜好に、當嵌つて居ると云ふべきである。

そも／＼老子の教は、基督教と、佛教とを混ぜ合せたやうなもので、幽玄なる哲學を根據として宇宙の道を説き、時間、空間を超越して、萬物の一元的實在を云ふところなどは、新約全書のヨハネ傳を彷彿せしめ、基督も老子も、畢竟同一體ではあるまいかとさへ思はせるほどである。それから佛教の混淆であるが、これは道教の説く善惡と、因果應報の過程に、明白に現はれて居る。道教では、因果應報は、この世で來るのであるが、イクラ悪いことをしても、報いの來ない奴は、地獄に行く。ところがその地獄も、餘り遠いところでは、利目が薄いと云ふので、例の四川省の酆都に、閻君洞と云ふ洞穴があつて、その入口に耳を當てれば、亡者共の泣聲が聞えると云ふやうなことになつて居る。この邊などは、確かに佛教の教へるところと、

同一系統に屬するものと、考へられる。

また道教では、一年中の善惡を、功過格と云ふもので決めて、一年の終りに、それ／＼の總決算をすることになつて居る。例へば人に錢を施せば、善五十點、人のものを盜めば、惡百點。それも金高によつて、一圓を盜めばイクラ、著物を盜めばイクラと云ふやうに、善惡の點數をつけ、それで年末になると、神様が、總勘定をなさることになつて居る。そこで何處の家でも、年の暮には、過年（正月を新年と云はない）と云うて、竈のお祭をして、各戸各家の竈の神様が、一年間の功罪を、天帝に報告することになつて居る。そこでこの日には、神様に飴を供へが齒に箝まつて、シヤべれないやうにするのださうな。それから爆竹を鳴らすのは、神様が天帝に報告されても、天帝の耳に聞えないやうにするのだと云ふのである。何處まで現實的であるのか、奥底の知れないところが支那式であり、神様に飴をネブラせるところなども、振つて居る。

道教は、春秋戰國の時代を経て、人心漸やく内省的となり、何か心に頼るものもがなと、寂寞と頼りなさ、淋しさを感じて居た時に、世に擴まつたもので、世道漸やく經世致用の學から、遠ざからんとして、秦皇、漢武のやうな人でも、神仙不老の術を求めたり、方士を招いて、怪術に耳を傾けるなど、兎角心の慰安を欲した時代相に投じたから、存外人心に合したものであらんと云はれて居る。

道教の教義に老、莊の學說やら、その時代の迷信やら、諸說やらを巧みに取入れて、心の平安と、長生保健の道を説いたのは、彼の張道陵（後漢順帝の時代）である。老、莊の如きも、謂はゞこれに利用せられたまで、何も老子が、自ら道教の開祖として、祖述した譯ではないのであるが、何時の間にか奉られて、祖師とか、玉皇帝、神仙など、呼ばれて、今でも民衆俗教の祖神と思はれて居るのである。尙ほ道教と離すべからざるものに、鬼神說やら、風水說やら、支那特有の迷信、信仰などがあるが、これは別に機會を得て述べることにする。

老子と楊朱と莊子

支那人の人心を支配するものは、老莊だけではないが、支那人に個人主義を鼓吹したものは、

この老、莊の説が、與つて力がある。老子の如きは、末年「關を出で、その落つる所を知らず」と傳へられて居るが、老子の仙骨は、『世の中が何んなにならうと、自分の關知したことではない』と云ふやうな、絶對個人本位の態度を、朗らかに表示して居る。

莊子に至りては、無用説を稱へて、何等世のなかに役立たないものが、最もよく天命を完うすることが出来る。橘、梨の如きは、食用になるが爲めに手折られるけれども、樗、櫟の如きは、無用であるから、天命を完うすることが出来る。吾人もまた世に處するには、無役無用であることが、大切であると云つて居るが、莊子の説は、老子楊子とは異なる點が多い。以下老、楊に就いて、少しく述べて見よう。

老子は、春秋時代、孔子より先きに生れた人であるが、彼れは自然の道、赤裸々の人たることを説いたので、一に清淨寡慾を説き、慾望は罪惡邪心の基因である。二に人爲を去り天眞であれ、禮法繁くして奸智僞飾あり、大道廢れて仁義あり、一切の人爲を去りて、自然の純眞を保ち、忠信の人たれ。三に自謙の柔徳を唱へ、水は卑きに就きて、争はざるも萬物を利す、柔よく剛に勝ると、驕慢を排斥し、消極的に謙徳の重んずべきを教へたが、『我に三寶あり、一、慈、二、儉、三、不敢爲天下先』と云つて、寡慾、天眞、自謙の綜合を説いて居る。この内で、柔徳、無抵抗主義の如きは、消極一途のものと思われ易いため、却つて後人から、謬つて見られた點もある。

莊子は、老子のことを至人、真人など、云つて、これを神仙化し、後漢の張道陵に至りては老子を神仙三尊の一に祀り上げ、トウ／＼道教の祖神に昇り上げたのである。

楊朱(楊子)の説は、老子の獨善、獨全思想、自然思想の足らざる他の半面を補うたもので、その説を擴充したものである。『禮文虚偽をカナぐり棄てよ、仁者必らずしも壽ならず、義者必らずしも富ます』『實に名なく、名に實なし、名とは偽のみ』『得難き人生を、名譽や、富貴に空費するのは愚である。宜しく自然慾に循ひて、悦樂すべし』と云ふのが、その根本である。

楊朱は、他人の爲めに、一毛を抜くことを欲せず、天下の物を盡して我れに奉ずるも、自己を束縛するものは、我れ之を採らずと云つたのは、有名な話であるが、彼れが個人の利己的享樂主義を、飽くまで透徹せしめようとしたこの態度は、墨子などの犠牲的奉他思想と、兩立しない點がある。これを討究するには、楊朱と、墨子の弟子禽子との對談を、述べるのが捷徑で

あらう。禽子曰く「アナタの一毛を抜いて、一世を濟ふべくんば如何」。楊朱「世は、固より一毛の能く濟ふところにあらず」。『濟へたとしたら如何』と遣つたところが、楊朱應へず。禽子出で、これを孟孫陽に語る。そこで孟がヒヤカして曰く「子、夫子の心に達せざるなり。若の肌膚を侵して、萬金を獲るとしたら如何」。禽子曰く「我之を爲さん」。孟孫陽「若の一節を斷ちて、一國を得るとしたら如何」。禽子默然たり。孟の曰く「一毛は肌膚より微に、肌膚は一節より微なること省なり。一毛は固より一體萬分中の一ではないか」。禽子が困つて仕舞つて「何と答へて善いか分らないが、子の説は、老聃（老子）、關手（西關の尹喜は老子隱遁の際老子に道を求めた人）に聞けば分るだらうし、私の説は大禹、墨翟（墨子）に聞けば、分るだらう」と答へて、別れたさうであるが、この問答は、楊子と、墨子との思潮の相違を示して居る。

支那人仲間では、その社會狀態から、個人的利己的心理が、昔から發達し過ぎて居たし、これを助長し、これに理窟づけたものは、老莊の學と、道教あたりの俗教が、やはり多くの責任がある。

墨子の兼愛説

老楊の個人主義と對立するものに、墨子の兼愛説がある。墨子（墨翟）の兼愛説は、彼れ自ら云ふが如く、利己主義、實利主義の時弊を救濟せんが爲めの、對症藥と考へられたのでもあらうが、この教義は、他人の親を視ること、我が親の如く、他人の身を視ること、我が身の如く兼ね相愛し、兼ね相利すると云ふ、平等無差別愛を、強調するところにあり。學説の根據を理論に措かず、天神、天意を採用し、鬼神の存在を信じて「上は天を尊び、中は鬼神に事へ、下は人を愛す」と、古聖の事蹟より歸納して、宗教的信念によつて、兼愛公利を圖つたのである。ところが徹底的に個人主義である支那人仲間、この説が實行される筈はないので、却つて彼れの唱へた非戰的平和的主張のみが、支那人一部の人心を支配して居るのみで、昨今の支那に兼愛なるものはない。

實利、我利

借妻—賣兒—泣き女—ロボット—軍人の念願—商業道徳—藥瓶

私は以上で、ほゞ支那人研究の端緒を、書いた積りである。以下支那人の個性を、解剖することに取掛る。

支那人は實利、實益の前には、何ものをも犠牲として悔いない。換言すれば、冷酷そのものであると云つて善い。支那には昔から、大義親を滅すと云ふ言葉があるが、彼等は、利益次第では、親をも殺し兼ねないこと勿論である。それから支那には、借妻と云ふことがある。自分の妻を、幾何かの金で、一年なり半年なり、人に貸與へることである。またこれと反對に、家に妻を残して、遠く出稼に行つた夫の留守中に、妻君は臨時の居候を住み込ませて居り、主郷に妻を残して、この臨時の旦那は、幾何かの金を貰つて、漂然として去り、彼我共に敢て意に介せないのがある。支那の各地では貧困者は三つ、四つの小兒を籠に入れて荷ひながら、市井に賣る習慣があるが、餘りにも悲惨な習慣である。三元、五元で、街上から買はれた子供等は、男であれば、一生コキ使はれ、女であれば、年頃になれば、妾にも昇進し、或は上官への贈物などにも代用され、顔の悪いものは、一生丫頭、すなはち無給の女奴隷となるのである。支那人のすることは、實利の前には、只蛇の冷たさがあるのみで、人情味も何もあつたものではない。

支那の笑ひ話に、首つりが腰に繩を括りつけて居る話がある。「オイそれでは、死ねないではないか」と云ふと、「實は首にも引つ掛けて見ましたが、どうも、呼吸が出来ませんので」と答へた話があるが、第六感の敏感な、實利に先見の明のある支那人の、ホントウに遣りさうなところではある。

支那の墓地に行くと、よく「オーウ、オーウ」と聲を張り上げて、哭く女がある。泣き女である。雇はれて、一日二、三十錢で泣くのである。泣いて居る最中に、話などを仕掛けると「聲の善い悪いで、色々値段も違ひます。私などは安い方です」と、一鎖り我々と世間話をして、また「オーウ、オーウ」と、涙も鼻汁も、一緒に流しながら泣くのが、「聲涙俱に下る」やう

で、如何にも眞に迫つて居るが、他面また如何にも、商賣らしい冷靜さがある。

支那人は、利益の爲めには、往々生死の危険を冒して、敢て意としない勇敢を持つ。日露戦争や、幾多の戦亂に、彈丸雨飛の中にある自家の家を守つて、動かないのがあつたが、それはマダしも、中には彈雨の中を潜つて、卵や、食べ物を賣りに來たり、藥莢や、彈丸の破片を拾ひに來たり、死屍の衣服を剥いだり、金を盗んで行く者がある。屍人の衣を剥ぐのは、如何にも支那式である。中には金が欲しさに、徘徊中、流丸に中るものさへあるが、コンな時には、生命も惜まないのみならず、友達が、流丸で死んでも、やはり戰場稼ぎを止めないのには、コチラがアキレさせられる。日露戦争の際、金さへ貰へば、兩軍の間を來往して、間諜を勤めたのが、彼等の中には澤山あつた。

支那では、白晝強盜が入つても、近所近邊は勿論のこと、街上に立つて居る巡查さへも、ワザと知らぬ顔をして居ることが屢々ある。他人の危険なんか「我不關」といふのが、街人であるが、巡查仲間にも「二個月幾塊錢的薪水、誰賣生命」と云ふ言葉がある。一ヶ月五、六圓で生命が棄てられるものかと云ふことで、巡捕は職務上の責任なんかは考へないで、只街上のポケットに過ぎないのが常である。支那人は、利己の爲めに節を賣り、利益の爲めに人を賣り、主人を毒殺し、妻子を捨てるやうなことは、殆んど朝飯前である。つまり彼等に取つては、金錢だけが、一生の伴侶であり、金故には、國も賣れば、殺人もやる。支那人が、賣國者を出しても、平氣であり、變節や、叛逆が、到る處に行なはれるのも、要は彼等が、餘りに實利本位だからである。従つて如何に困難な交渉も、金次第では、如何やうにもお天氣が變り、地獄の沙汰も金次第と云ふ俚諺を、如實に味は、されたことが、我々の體驗にも屢々ある。

昭和三年、四年頃の著しき新傾向として、日本あたりに留學中の、早稻田、慶應出の俊才が、卒業後さらに日本の士官學校に、入學を希望するものが多々あつた。それは、今このまゝ支那へ歸つたところで、何うせ武官にでもならなければ、何事も出來やしないし、金儲けになる第一近道は、武人になるに限ると、彼等は考へたからであり、また口に出して、然う云つて居たものである。なるほど、支那の軍人は、兵力を以つて、民衆をオドして、金儲けをするので、師長や、旅長の二、三年もやれば、金の三百萬や、五百萬は、立ちどころに出来る。故を以つて成金となる捷徑は、兵業が第一であり、兵隊となることである。前述の士官學校に入らうと

する支那人が、多かつた理由も、これで分る譯であるが、實利、實益の前には、何ものも顧みない彼等の犀利なる眼光と、物ごとに囚はれない點には、全く三嘆させられることが多々ある。

日本あたりでも、支那商人は勤勉であり、能く努力し、能く勉強し、且つその商業道德は、良好であると云はれるが、私としては、これもやはり自己可愛いさの故であると、云ひたいのである。支那人の商業道德には、非常に信頼し得べき半面と、極めて不信なる半面とを持つて居り、私は寧ろその極端なる實利主義に、一驚せざることを得ない。先年漢口や、上海に居た時、某大商人のことを三井に聞くと、トテも評判が善く、信用もスバラしい。そこで或る必要から、これを大倉、三菱などに就いて、調査したところが、驚ろくべし、彼れは到るところ、不義不信ばかりを、働らいて居ると云ふことを發見した。これは支那人でも、商人のみは、信頼し得べしと、信じ切つて居つた私には、實に意外なことであつた。そこで爾來色々な支那人の商業道德に就いて、研究して見ると、彼等は「この店に信頼を得れば、飯の種子には困らない」と見たら、その方面には、全力をあげて、汗水垂らして忠信振りを發揮し、多少の損耗、

また意とせないが、その代り他の方面は、總てこれ悪行非道。商品を誤魔化す、金は拂はない。その商貨を轉賣するといふ有様で、全く以て手にオエないのが、澤山あると云ふ事實を知つた。支那人の商行為は、手形も、貸借證もなしで、面子一點張りで、信用賣買をやることが多いが、これは彼等同業者の間に、嚴密な制裁があるからである。支那に於ける同業者の團結、すなはち同業組合とか、幫とかいふものは、極めて結合の強いもので、この仲間で、一旦不信を働いたら最後、同業仲間から、永久に放逐されて、爾後その商賣には、一切手が出せなくなるのである。だから相互制裁の不十分な外商あたりが、ウツカリ支那の商業道德を信頼するのは、極めて危険なことである。

下層の民衆の實利主義では、さらにヒドいのがあり、思はず噴飯させられることさへある。日獨戦争後であつたが、日本が、山東省李村の民政署で、無料施藥を爲したことがある。支那人の習性としては、水藥よりも丸藥を、然して丸藥よりも散藥を好むものであるのに、彼等の多くは、何れも水藥を希望するので、これ畢竟我が醫藥を、信頼するものであらうと信じて居たところ、意外にも毎月二回の市日には、夥しき古藥瓶が、市場に販賣取引されるに至り、そ

こで彼等が水薬を希望したのは、薬瓶が欲しかつたのであつたことを知つて、思はず吹出したことがある。如何にも民度の低い、生活程度の下卑た、支那人の仕さうなことであるとは云へ、彼等が如何に實利本位に、透徹して居るかは、これでも分る。

従つて支那人を研究するには、この利己、實利と云ふことを見逃してはならぬことになるのであるが、これは支那人を通じての性癖である。すなはち上は大總統から、下は乞食、苦力に至るまで、彼等の行動の基調を爲すものは、利己、實利、我利である。如何なる場合にも、彼等の進退は、自己の利害を度外視して、行なはれるものではない。彼の排日排貨も、愛民、愛國運動も、一寸見ると、大義名分に透徹して居るやうであり、團結や、統制があるやうに見えるが、實はそれ／＼自己の取引なり、商策なり、賣名から出た實利本位が、その基調を爲して居るのである。このことに就いては、筆を改めて述べるが、この點は我々日本人と、大いに異なつて居るところである。

自己保存

官吏の心—我不關—病人は請負—親子の情—株式會社—洞ヶ峠

支那の社會状態は、前にも述べた如くであるから、支那人は、自分以外の何ものも、アテにはならぬと考へて居る。これは換言すれば、自分のことは、他の何ものも構つて呉れないと云ふ考へ方である。そこで各個人は、自己保存の爲め、我利を圖り、私財を作り、自己を大ならしむることに、専念するに至るのも、自然であると云へる。殊に政府、官憲の無力な爲めに、國民は、自分の明日の地位をも、保證されて居ないのが常態であり、既に社會状態が不安であるとする、一旦官吏なら、官吏の位置を得たならば、明日をも知れぬ將來を考へて、夢寐の間にも、蓄財の方法を考へるのが、自然だと云ふことになる。また斯ういふ理由からと、多年の社會的習慣から、支那人は、親や妻子でも、自分の肉親でも、總てが、イザと云ふ時には、決して味方とはならない。親兄弟でも、猜疑嫉視が多くて、打ち明けて、相談相手とはなり得

ないものであることを、能く知悉して居る。従つて自分は、自己だけの未來を、セツセと開拓して行くのみで、この間には、親も、兄弟も、義理も、人情も、考へては居られない。況んや友人や、近親などのことは、外形は兎も角、内實は一切顧みないのが常である。すなはち彼等の進退座臥は、自己保存の四字に盡くる。一切の行動は、他人の陥穽に對し、如何にして自己を防衛し、保持し、増大しようかによつてのみ、決せられるのである。

この故を以つて、日常生活の間に於いても、支那人は極度に自己本位である。自分の職分として、定められた以外のことは、相互に助け合ふことは、殆んど稀れで、特別に自己の利益にでもならない限りは、遣らない。俄か雨にボーイは、アワて、御自分様の洗濯物は、取入れるが、さて主人の布團や、友達の著物などは、取入れない。「人の物を取り入れて、若しも無くなつたり、損傷させた時は、自分の責任である。君子は危きに近寄らず」と云ふのが、彼の申條であり、觀念でもある。

支那には、我關せず「我不關焉」と云ふことがある。自分の受持以外のことには、一切關係しないと云ふことである。何か自分の責任にでもなりさうな場合には、すぐ我不關と答へて、平氣なのが常である。(これは責任回避である)。コック、ボーイ等、また極めて利己主義である。彼等を雇ひ入れるには、掃除、風呂たき、洗濯、買物、何々、何々と、一々その負擔すべき職域を明らかに指定して、それで月給イクラと、ハッキリ約束をして置かないと、約束以外のことは、決して遣らない。強ひて遣らせる爲めには、別に酒錢を必要とする。コックは飯のことだけ、甲のボーイは、客の應接だけ、乙のボーイは、室内の掃除と、物品の保管が役目だと、假りに分別したとすれば、それ以外のことは、金輪際遣らないのが、支那人の習慣である。コンなことは、下層階級のみならず、各階級、有識者、また例外なしに然うである。實例は後で述べるが、官吏でも、軍人でも、本務の外に兼職をさせる時には、一々別の給料を増加するのが習慣であり、規定外の仕事を命ずると、苦力でも、酒錢をネダリ、ヒドい話だが、金を出さなけりや、火事場の水も呉れないと云つたのが、往々にしてある。

支那人は、妙なところに見識振つて、ボーイなどは、自己の門内の掃除はやるが、門外一步を出づれば、犬の糞、馬の糞が、山のやうに堆積して居ても、敢て掃除をしないと云ふやうなのがある。蓋し門外は、市役所の苦力が遣るべきものであり、我輩はソンの役目ではないと云

ふのである。これなども、彼等の面子根性と、我利々々心理とから来る現象であらう。

官憲の不良な爲め、努めて責任を回避しようとする心理から、顯著なる利己的場面を展開することが、往々にしてある。路傍に、自己の親友が、病気で倒れて居つても、世間の手前さへなけりや、警察から因縁づけられたりするのがウルさいので、我不關焉で、行き過ぎたりすることは、屢々である。重病の親を、病院の入口まで昇ぎ込んで、さてこれをイクラで直ほして呉れるかと、入院料を値切る場面を、能く漢口やら、天津やらで、見せつけられた覚えがある。一般に支那では、この病人は五十元とか、この病人は七十元とか云ふやうに、治療まで一切を、醫者の請負でやらす習慣があるが、根氣よく入院料をネギるのみならず、価格が折り合はないと、瀕死の重病人を荷いで、ノコノコと自宅に連れて歸る。これは何うせ直ほらない病氣なら、イツソのこと死後の棺桶でも、立派なのを慥らへた方が、第一世間體も、面子も善いと、考へる妙な習慣からである。

親子同志でも、衣食や、金錢は、別であることがある。私は北京でアマ(支那婦人)と、十三歳になるその娘とを、一緒に雇用して居たが、親は親、子は子で、別々に食事を拵らへて居ることが多く、親は、自分だけの御飯を、サツサと拵らへて、子供には構はなかつたり、子供は、うどんを拵へて食べ、親は別個に、饅頭を食べて居ると云つた按配である。僅か十三歳の少女に對する親子の關係でも、斯んなもので、その間に親子の恩愛などは見られない。別々に給料を貰ふのだから、別々に飯を食べようと、別に不思議はないかと云ふのが、彼等の普通の心理である。

北清事變の時、確か通州の近處で、一少女が、露國兵に捕へられた時、日本兵が、その母親を責めたところ、アノ時若し子供を助けようと思へば、私も捉まへられて、自分の命も、持つて居る金も、共にアブないではないか。子供を捨て、逃げたればこそ、自分と、金と二つだけでも、助かつたのではないかと、云つたものである。「燒野の雉子、夜の鶴」と云ふ日本人の考へから見れば、到底堪へ得られぬほどの冷酷さではあるまいか。

親子の情愛に就いては、尙ほ幾多の實例がある。日本人が、田舎を旅行すると、村中の病人が集つて来て、色々と藥を要求するのが例であるが、こゝに山東の或る一驛で、一支那人から頼まれて、彼れの母親の病氣を診た人の實話がある。ミーラのやうに拵せて、煎餅蒲團に寢

て居る母親は、極度の衰弱で容體も悪く、梅毒性の婦人病らしいので、青島の病院に入れるが善いと、薬と、療法とを教へて遣つたところ、病院に行けば、イクラ掛るか、それから薬だけならば、イクラで直ほるか、さらにこの儘棄て、置けば、何日位で死ぬかと、コマ／＼と尋ねるから、この容體では、十日は六づかしいかも分らないと教へたところ、その實子の云ふことが振つて居る。曰く「何うせ生命がないものならば、寧ろこの儘死なせた方が、薬代も要らず、損にもならぬから善い」と云つたと云ふことである。これでも村では、孝行息子と云はれて居る方なのである。孝は百行の基と云ふけれども、それは自分の利害と、ピッタリ符合する場合に於いてのみ然りで、且つ面子や、體面上、好都合な場合に利用されるだけで、眞實の犠牲的の孝は、支那人には見られない。さらに支那人の自己本位のヒドい一例は、凡そ支那では、個人か、または一族の合名會社ならばまだ善いが、株式會社と云ふやうなものは、殆んど成功したタメシがない。私の遭遇した二、三の實例を擧げるならば、株を募集して、未だ機械も運轉しない内から、利益の配當を要求する。電燈會社は、官衙、兵營から、一切の電燈料の代りに、常に銃劍で脅かされつゝある。紡績會社は、その製品も、未だ出來ぬ内に、重役は、株券を質に置いて、有金を浚つて逃げる。公共心のないこと、只アレ／＼とアキれるばかりである。

支那の政客や軍人は、一事件が起るごとに、この機會を、如何に自分に有利に展開しようか、如何に高價に、自己を賣りつけようかと云ふことを考へ、これが主題となつて、打算的な彼等の自己保存の爲めの行動が、決められるのが、通則である。だから何か事件が起るや、その態度を灰色にして、洞ヶ峠を極め込むのは、總ての支那人に共通する慣性であつて、何も馮玉祥や、閻錫山だけではないと云ふことになる。何れにせよ、その色彩の不鮮明な間は、要するに形勢を見て居るのであつて、この不鮮明が、やがて鮮明なる叛逆に代り、鮮かなる背反に代る時は、彼れが高價な賣却先きを、捉へ得た證據である。支那人を觀察するのには、この邊の心理状態を忘れてはならない。民國十三年十月第二奉直戰の際の馮玉祥の寢返りの如きも、また十四年十一月郭松齡の叛逆の如きも、まさに彼等の自己的心理を、知悉することによりてのみ、釋然たり得らるゝ事實である。

七人の子は爲すとも、女に心許すなど、支那では云ふが、支那人をして、斯く猜疑と、極度の利己本位に終始せしめた主因は、官吏の不法擄取、官憲の無力が、軟柔陰險な個人本位の支

那人を造りあげて仕舞つたことにも因るが、その複雑なる家庭状態と、制裁不十分なる社会組織、表裏反覆と、叛逆とを、意に介せない社会制度等の、罪に歸せねばなるまい。これを要するに漢民族なるものは、厄介なる民族である。

金 錢 慾

ニタリ、ギョロリ—二圓に負けろ—賣國—火事場の水—

掛け値—俸屋—親善論—金故に

支那人の利己心は、一種特別の存在であつて、彼等を驅つて、一生を利慾の爲めに捧げ、金錢の爲めに、死生を賭するに至らしめて居るのは、徹底して居ると云へば、云ひ得らるゝ。彼等が學問をするのは、官吏とならんが爲めで、官吏になるのは、不當利得の最捷徑と考へて居るからである。最近でも、官吏の間には、何處の局長は一萬圓、何處の縣長は六千圓といふ風に、金で賣買される習慣があるが、不當利得があればこそ、何萬圓かの金を出してまでも、官職が賣買される譯である。

人情なく法律なき個人本位、これが支那の實狀であり、金以外には、親子すら頼むに足らないと云ふのが、ホントウの支那の社会状態である。従つて自然に、明けても金、暮れても金と、

金の亡者になるのも、また已むを得ないと云はなければならぬ。支那人の理想は、福、祿、壽の三つである。「出門大喜」とか「發財」「生財」と云ふ字句が、新年早々から、門口に貼られるが、新年の挨拶に、取り交はされる芽出度の言葉も、金のことが多い。發財とは、金が殖えるといふことで、彼等の一生の理想であり、祈願である。従つて支那人は銀貨、銀塊、馬蹄銀など、金錢を非常に喜び、心から歓迎する風が見える。彼等は先天性の愛錢家で、銀貨を見た時のウレしさうな顔つきは、また特別である。ボンと投げ出された銀貨の顔を見ると、支那人は、丸で別人のやうになり、必らずニタリと、顔の相格を崩して、心から嬉しさうな風が見えると共に、眼の色がギョロリと光る。何んだか猫が、魚を狙ひ當てたやうな有様が、アリ／＼と見られる。また支那人は、銀貨の眞偽を確める爲めに、一々これを叩いて見る癖があるが、一圓銀貨を、ボンと机上に投げつけて、チーンと響くその餘韻を聞く時の、それは／＼嬉しさうな彼等の顔は、トテも外では見られない圖であり、金錢に執著心の強い彼等を知るものは、思はずゾツとさせられるのである。

彼等は金錢に特に敏感であるのに、一方に於いては、或はまた餘り金錢に敏感である爲め、錢を見たら、勘定が解らなくなるのではあるまいかと、思ふことさへも屢々ある。支那人は勘定高くせに、禪坊主めいた茶人味がある。いま假りに五圓と七圓と八圓の骨董品をヒヤかしたとする。私がこれを四圓と、五圓と、六圓と、合計十五圓に負けさせようとしても、決して負けるものではないが、この場合、一圓銀貨を、ゾロリ十三枚出して、品物を引つ抱へて行くと、彼は金は欲しいし、負けたくはないし、トツオイツ思案の揚句、眼の前の銀貨に眼が眩んで、十五圓にも負けられないと頑張つた品物を、十三圓でオーライと遣るのである。何んと妙な心理の民族ではあるまいか。「明日の百圓よりか、今日の一錢」と云ふこともあるが、彼等の心理状態は、これを眼のあたり體驗した人でなくては、釋然たり得ないものである。

支那の一口話に、溺死者が水を呑みながら、指を二本出す。上から救助船が三本出す。「三圓出せ、助けてやるぞ」「イヤ二圓に負けろ」と云ふ場面があるが、昨今これに類似の實例は、イクラでもある。私もイクラ支那人でも、マサカそんなことはあるまいと考へて居つた一人であるが、現に上海のバンド(河岸)で、瓜形の舢板や、舫子が、渡船などの溺れ者の廻りに集つて、水の上から、救助料の談判をして居るのを、時々見たことがあり、成るほど水死の間際

まで、金の談判をし、救助料が決まらなけりや、引上げないのだなと、ツクム／＼感心したことがある。日露戦争の時、法庫門で、或る百姓が、金をシコタマ腰に巻きつけて、逃げ惑ひながら、遂に井戸に陥ち込んだ。他の百姓が『五十圓出せ、助けよう』と談判をしたが、トウ／＼談判不調に終つて、彼は哀れにも、水死したと云ふ實話がある。

金錢慾を通り越して、金錢に執著をすることは、愛錢の極であるが、支那人には、相當の知識階級でも、金の問題になると、國の爲めにも、人の爲めにも、鏗錢一文すら出さないのが普通である。これは愛國を高調する彼等有識階級と交際しつゝ、ツクム／＼我々の體驗させられる實例であり、まことにイヤな思ひ出であるが、彼等の愛國や、愛民は、やはり利慾の範圍を出でないのであることを、私は屢々滿喫させられ、痛感させられた一人である。従つて支那人は、金が欲しさに、國事の祕密を持ち出したり、政府の祕密を、賣つたりすることは、別に罪惡とは考へないやうで、皆一廉の知識階級が、平氣でこれを遣つて居る。否、金故に、國利、國權を賣る政治屋の絶えないばかりか、二元、三元の金で、自分の妻、妾に、窃かに春をヒサがせるのが、チヨイ／＼ある。これは何れの國でも、教育のないものには、絶無ではない現象であるが、支那人は、相當の地位あり、産を持ちながら、尙ほこれを遣るのであるから、全く恐入つて終ふ。金にさへなれば、支那人は何んなことでも遣ると見て、間違ひないのである。

彼等が利慾に掛けて抜け目がなことは實に恐るべく、全く三嘆させられる。南方では、木材家屋が多い爲め、火事も相當火の手が早いが、上海や、杭州では、火事場にセツセと水を運んで、一桶三錢、五錢に賣つて居る男がある。人の生死の境に、金で水を賣るヤツも、賣るヤツだが、平氣でこれを見てるヤツも、見てるヤツだと、云ふ感想が禁じ得られない。だから金にさへなれば、十仙やれば、柳の鞭で頬つべたを叩かせる、など、云ふのは、支那人では能くある例である。ハルピンで、某友人が、車夫が生意氣だと、トウ／＼腹を立て、イキナリ横つ面を一つ喰はして、叩き貸だと、十仙投げ出したところが、十仙になるのなら、こちらも一つ叩いて呉れぬかと、反対側の頬つべたを指さしたと云ふ、嘘のやうな實話があるが、成るほど支那人に有りさうなことだと、思はず小膝を叩かざるを得ない。

警察官吏の腐敗せることは、賄賂の項に於いて述べるが、地獄の沙汰も金次第。監獄は、金のないヤツは歓迎されない。また未決監は、金の有りさうなヤツを繋いで置く所で、まだ官憲

との搾取取引きの談判の決まらない、金のありさうなヤツが、取引きの決まるまで、繋いで置かれる所だと見てよい。斯う云ふ譯だから、支那の司法制度、警察制度などは、これまた金銭慾を離れて、觀察の出来ないものである。上海の會審衙門あたりを見て、支那の法権備はれりと考へたり、治外法権撤去すべしと考へるのは、西洋人達の大間違ひである。アレは外國人に見せる爲めの裁判所であり、外國人に見せる爲めの監獄であつて、ホントウの支那監獄は、モット／＼酷いものである。英人エー・イー・リリアスの『南支那の彩帆隊』と云ふ本の中に、香港の英國監獄の記述があるが、アレを更に／＼酷くしたやうなものが、真相である。またさらに見逃し得ないことは、支那の警察は、何とか口實を設けて、金の有りさうなヤツを警察に拘留し、その釋放料を搾るのが、本業であるとして見てよい。併しこれ等のことは、また別に述べることにする。

斯くて政治家に搾られ、兵隊に搾られ、土匪に搾られ、警察官に搾られる國民が、如何にして金を貯藏し、如何にして貧乏な風を装ふべきかと云ふことに、苦心するのは、無理からぬことであり、氣の毒なことでもある。このやうにして支那人をヒネくれさせ、猜疑心や、責任回避や、利己本位たらしめたことは、當然以上の當然である。だから彼等が率直でないのと、利慾に強いのは當然で、如何なる場合にも掛け値を云ひ、騙引を遣ることを、忘れない。相手の顔色を見て、一元のものも、二元と云つたりする。骨董屋の如きは、百元、二百元と云ひ出すが、客の方で買ひ度くもないやうな風で、根氣よくこれをネギると、トウ／＼二元、三元に負けて終ふ。これはタトヒ五元でも、八元でも、少しでも餘計に収入があれば、それだけ天佑である、彼等は考へて居るが爲めであつて、品物そのものゝ實際的價値が、幾何であるかは、彼等の問ふところではないからである。骨董以外の他の如何なる商品でも、最近の新式大商店を除く外は、一割、二割の掛け値のあるのが通常で、然うかと思ふと、反對に客の面子を立て、負ける場合なども色々あり、騙引の多い民族である。

以上の習慣は、常習的であつて、爲めに田舎人は、往々汽車賃を値切つたり、郵便切手代を負けろと云ふやうな珍話を、澤山に製造し、支那人のなごやかなユーモアの半面が窺はれるが、一面支那人が、如何に金銭慾に敏感であるかと云ふことゝ、到る處に掛け値、騙引があることに感心させられるのである。だから普通支那では、品物を買ふには、成るべく、欲しくも

ないやうな顔をせねばならぬ。賣らなけりや、買うて遣らないぞと云ふ態度で、一度門口まで出て終ふ必要がある。斯んな時アワて、後から呼び止められても、「負けるなら仕方がない。要らないものだが、買つて遣かはず」と云ふ態度が入用で、實は、喉から手が出る程欲しい場合にも、この態度を嚴守することが、大切である。

外交交渉などにも、この種の驅引が、屢々必要なる手段として、行はれるのだから叶はない。例へば支那の俵に乗ることは、馴れないものには、確かに一苦勞である。最初に俵の値段を決めて置かないと、金を遣る時には、決まつてユスリを吹きかける。玉なす汗を流して、イキセキ切つて驅けるのを見ると、日本人はツイ氣の毒になつて、五仙のところも、七仙遣り度くなる。すると彼等は、その七仙を、イキナリ大地に投げつけて、十仙ヨコせと、高飛車に出るのが常である。彼等の心理から云へば、五仙のところを、七仙も呉れるからには、この男は金持か、土地不案内か、俵の相場を知らないか、それとも馬鹿であらう。何れにしてもこの際、取れるだけ取るべしと考へて、イキナリ七仙を投げつけて、十仙ヨコせと云ふのである。ロシア人も「支那人に白齒を見せるな、笑顔をするな」と云つて居るが、これは至言である。支那人はすぐ増長するから、支那人に對するには、苟しくも哀憐の心を起してはならぬ。七仙、八仙は遣りたところを、心を鬼にして、先づ五仙やり、ものゝ一町もついて來たら、その時にさらに一仙やる。まだ足りなければ、矢張りついて來るから、また半町も行つた時に、いま一仙を投げつけてやる。この邊が大體同情心の境目である。俵屋は後に残した俵と、前に行く客とを、半々に眺めながら、ソロ／＼俵の方が心配になると、そこでヤツと諦めて、後へ歸ると云ふのが常態である。日本人の心理から云へば、コンな可哀想なことを仕たくもないが、然うでもしなけりや、彼等は何處までツケ上るのか、分らないのだから、致方がない。

能く世上では、ワンポツ親善論を唱へる人がある。ワンポツとは、上海に於ける黄包車ワンパオチョウ（人力車）のことである。ワンポツに一仙づゝ、定價よりも餘計に遣ることは、やがて彼等をして日本人を理解させ、日支親善が、それから芽生えて來るといふ見解なのである。私も、支那に最初來たころは、この心持で、この主義にも、衷心同感だつた一人である。社會的にも、階級的にも、平等なる支那人に對しては、大總統も、ワンポツも、一視同列で扱つて善い。だから先づワンポツ階級と、親善になることは、やがて四億の民と、親善になることであると、私は

考へて居たのである。ところが四億の民が、皆ワンポツ階級だと、私が考へたことは、今でも眞理であり、毫も間違ひでないが、この増長限りなき漢民族に、親善を求めようと考へたことは、明かに私の遠算であつたことが分つた。そこで近來私は、私の支那人待遇法を改正實行して居る。それは先づ俵屋に、私が正當だと考へる定額だけ遣る。然して若し彼れが、文句を云うた時は、黙つてその中から、一仙を取戻す。さらに文句を云つたら、また一仙を取戻す。尤もこれは日本租界でしか、出来ぬことであるが、兎も角も斯うすると、ワンポツは、日本人に對しては、ツケ上りや、頑張りは、結局自分が損をすることを、ハツキリ認識することになる。斯くして四億のワンポツに、日本の取るべき態度と、ワンポツの踏むべき途とを、理解させることが出来る。白刃を咽に擬して、白刃か、金を直解させることが、四億のワンポツに對する、情味ある裁決であらねばならぬと、私は考へるやうになつた。話が妙な方へ脱線したが、漢民族の金錢慾と、驅引とを、研究することは、やがて我が國對支外交の踏むべき針路を、見つけることに、なりはすまいかと、考へて居る。

さらに蛇足であるが、支那では、旅行途中でも、自宅の使用人にでも、如何なる支那人にでも、金の所在を見せることは、禁物であり、生命掛けである。日本の強盜は、白刃を突きつけてユスるけれども、支那の強盜は、イキナリ殺して置いて、ポケットに手を入れるのが、常套手段であり、常人でも、人を殺すことは朝飯前で、極めて残忍なことを平氣でするから、氣をつけねばならぬ。總ての階級の支那人に對して、金の所在を見せると云ふことは、何等かの手段で、金を取られるか、生命までも危険に導くものであることを、心に刻んで置かなければならぬ。大正九年歐洲戰爭の時、北京を追ひ立てられた一ドイツ人は、十七年間育てあげた、仔飼の親愛なる支那人ボーイから、出發の前夜に殺された。それは抽出にあつた、タツタ四百圓餘りの有金をサラつて、逃げんが爲めなのであつた。また河南の鄭州で、一フランス人の妻であつた某日本人は、多年家事一切を委せてあつたそのボーイの爲めに、偶ま主人の不在中に、見るも無慚な殺し方をされて、ボーイは、豫め目星をつけて置いた箆筒の有金二百圓と共に、姿を隠して終つた。斯んな例は、枚擧に追ないほどで、徳川時代の講談ものでも讀むやうな感がある。

賄賂の國

吉良上野介—無給のコツク—門錢—外水—中飽—技師長—

三方が五圓—蓋金局—警官の儲け口

支那は米國と共に、有數なるコムミツシヨンの國である。何事にも手数料と、袖の下は當然である。支那人は、他人から、物を贈られた時は、先づその贈物の値踏をする。『これは五圓の品物であるナ。では自分は、五圓がとこだけ、彼れに厚意を表すれば善い』と、こゝまで考へて、ハテこの男は、何を頼みに來たらうか。何は兎もあれ、五圓がとこ好意を表しよう、斯う云ふ態度で、人に接するのである。

假りに某商が、某大官に手土産を持つて、訪問したとする。『ハ、アこの男は石炭屋だナ。それならば石炭の買上げに就いて、頼みに來たのだらう。宜しい、魚心あれば、水心で遣つて見よう』と、先づ彼れの第六感が働く譯なのである。支那では、贈物も、單なる好意ではなく、一廉の商取引である。日本にも、吉良上野介のやうなのがあるけれども、支那の上野介は、一層惡辣である。三十三年北清の役に、西太后が、西安に蒙塵せられた時、或日某縣に泊られたが、取巻き連に對する知縣からの袖の下が、足らなかつた爲め、その晩西太后の御飯には、シコタマ鹽が入れてあつた。知縣は、不注意の故を以つて、早速首になつたことは、云ふまでもない。官吏に袖の下は、ツキものである。彼等が苦勞して書を読み、その上で、官吏の試験を受ける爲めに、數千圓、乃至一萬、二萬の金を纏めて、上司に奉るのも、我が身可愛さの故ではあるが、困つた習俗であることに、議論の餘地はない。清朝の末年まで、支那の官吏になるには、表面上は、試験制度になつて居つたが、裏道は、贈賄と、縁族と、買官とであつた。多分の金を出して、一つの官にアリつくのであるから、一日も早く、その資本を回收する爲めに、官吏共が有りと有らゆる收賄を遣るのに、何の不思議もない譯である。

支那では、ボーイ、コツクは、殆んど無給に近い料金で、働く習慣であるが、これは給料の外に、収入があるからである。コツクは、買物の一割の上前を、ハネるのは通常であり、日本人や、支那の大官のコツクが、米麥の資を誤魔化すことは、餘りにも有名な事實である。支那の

習慣として『大官はその勝手もと(臺所)を覗かない』と云ふのが自慢である。従つて料理人達の誤魔化すことも、手に入つたものである。支那人コックが、一番喜ぶのは、日本人の奥様連中である。一ヶ月に、米を、六斗も、八斗もたべて、魚屋の拂ひが百元からあつても、一向平氣だから、一番相手にし易いと云つて居る。だから日本人は、モツと臺所をシメてかゝらなけりや、支那での發展なんか、六づかしいことである。ボーイの如きは、古新聞、空瓶は勿論、時として、米やら、石炭まで持出して、窃かに自分の収入にする。また不思議に、バケツ一杯の石炭でも、チャンとそれを買取る専門の買受屋があるのだから、流石は拔道だらけの支那ではある。

大きな住宅、役所などは、門番が出入の商人から、上前をハネることが、當然であつて、北京邊りでは、これを門錢(門包)と稱して居る。出入の雜貨屋とか、反物屋とかなどから、買上げの都度、買上高の一割なり、五歩なりを、頭をハネることが、恒例になつて居る。それからさらに面白いのは、何事にも酒手(酒錢)が要ることである。例へば私が、自家用の俵に乗つて、果物を買ひに行くとする。車夫は、必らず帳場に行つて、銅貨の五枚か、七枚をセシめる。曰く『オレがこの旦那を、連れて來たからこそ、お前の果物が賣れたのではないか。割前をヨコせ』と云ふ譯なのである。田舎を旅行すると、ボーイは、外水(給料以外の収入)と稱して、色な著服や、誤魔化しを遣る。先づ第一に、宿に泊ると、彼我の間に立つて、宿賃を決めて、その差額を著服する。駕籠とか、馬車とかを雇ふと、これ等の賃金の中から、一圓なり、二圓なりを、彼等から手数料として頂戴する。遣る方も、取る方も、それを當然な収入として、敢て怪しまない。従つてボーイ等の給料は、極めて安いか、或は支那人の家庭などでは、全く拂はないものすらある位である。友人を、何處かのボーイなり、小役人に周旋する際には、その手数料として、月々給料の一割位を、上前としてハネる約束をする。現に私の貧弱な田舎出のボーイの如きすら、友人を近隣へ周旋をして、月々一圓餘りづゝ、世話役料を貰つて居つた。さらに私の某知友は、三軒の借家を持ち、その外に、四人の小役人を周旋したので、月々この方からも、二十圓餘りの収入があると喜んで居つた。

支那人の口錢(中飽)制度は、有らゆる階級に、行なはれて居る。先年漢口の兵工廠に、日本の某大商店から、石炭を納入したことがある。一トン十二円で契約したに拘はらず、會計主任

から十三元五十仙として、受取證を出すことを要求せられて、英國歸りの支店長は、慌てゝ私に相談に來たものである。奇怪は、それだけに止まらず、さらにイヨ／＼現品を納入する段になつて、兵工廠の門番は、通門料として、トン當り十仙宛の酒錢を要求し、さらにカン／＼秤りの主任者達は、秤量の手數料として、別にやはりトン當り十仙宛の酒錢を要求する。最後に構内苦力は、その石炭を下す代錢を要求し、今後も、お前の處の物を買つてやるからと云ふことで、イクラかの酒錢を要求されたので、結局トン當り十二元五十仙ばかりになつたが、この外に、先方の會計方は、十三元五十仙で買つた風をして、官金を誤魔化したこと勿論である。さらに今一つ、これと同じやうな例がある。上海の某石炭商が、その石炭を、支那側に納入するに方り、先づ會計方、ついで門番、現場監督から、それ／＼イクラかの酒錢を要求され、イヨ／＼最後に技師長からも、トン當りイクラかのコムミツシオンを要求されて、トウ／＼ソロバンが合はないので、契約破棄の已むなきに至つたことがある。武器の賣込みでも、機械とか、米とかの取引きでも、その幾割かは、これを仲間の取扱者、關係者一同に分つのが、習慣である。

會て民國十三年ごろ、奉天に無線電信を建てる爲め、某國側、日本、それからオランダの某會社から、入札したことがある。日本は七萬圓、オランダは十二萬圓、某國は確か十七萬圓であつたが、某國側は、關係者に對して六、七萬圓のコムミツシオンを贈つた爲めに、譯もなく十七萬圓の方に、決定したことがある。入札と云ふのが、これなのだから、妙な入札もあればあるものである。

先年ハルビンで、電燈會社を始めようとしたら、ハルビンの長官飽貴卿は、十萬元を酒錢として要求した。民國六、七年の西原借款や、參戰借款が、何處へ消えたかは、世界周知の好例である。支那では、或る事件の成立の裏面には、常に相當な袖の下を必要とする。これは支那人を扱ふに、大切な要訣であることを、忘れてはならない。

昭和八年フランスは、正太線借款延長に、交通總長へ三百萬フラン贈つたとて、顧孟餘は、監察院から彈劾せられたものであるが、彈劾する方が、間違つて居るとしか考へられない。それほど支那人の金錢に對する考へは、徹底して居るのである。だから、汽車の寢臺は、ボーイに、一、二圓掴ませると、容易に空席を發見し得る。その方が、ボーイも儲かるし、御客様も

儲かるではないかと、平氣である。昭和五年ごろ、吉林、北平間の急行車は、寢臺用毛布に、一組ごとに錠前をつけて、寢臺券と、引換へにしたのは、斯る習慣を防止する爲めであつたが、これすら終ひには、何うやら抜け道を考へて、毛布を別にボーイが、賃貸しすることになつた。曾て山東鐵道で、汽車の切符を盗んで、賣りに來た二人連れの支那人があつた。彼れは「この十五圓の切符を、十圓で買へ。然うすれば、我々二人は五圓宛儲かるし、あなたも五圓儲かる。三方五圓宛儲かるではないか」と云つたので、思はず笑はせられたことがある。汽車に乗つて、一等車あたりでは、部屋のない時、一元出せばボーイが、ニヤリと笑つて、すぐ部屋を一つ準備して呉れるのは、餘りにも有り觸れた常事である。鐵道當局は、時々これを八釜しく取締りを始めるけれど、不思議に、間もなく、また元の通りになるから面白い。

上海の電車には、時々監督が乗つて、検査をするが、それでも車掌は、お客と馴れ合ひで、使ひ古るしの切符を利用して、三仙、五仙を誤魔化したりするのを發見して、我輩も、この車掌君の變通性には、ツク／＼感心させられたことがある。

商人が、支那の田舎を旅行する時、最も困らされるのは、捐稅局である。漢口あたりから、上流漢水を、船で上るとする。仙桃鎮あたりまで出るにも、漢水の所々に、公私の集稅局がある。船をつけて、検査を頼んでも、「今居ない」とか、「忙がしい」とか、一向遣つては呉れない。その内に後から來た船は、先きに検査を済ませて、出發する。つまりコツソリ若干の袖の下を、先づ持参したものは、無事に通過するが、その他は大抵明日まで待たされて、オマケに集稅吏がやつて來て、三ツ又になつた鋭利な槍で、一々荷物を上から突き刺して歩く。衣類とか、大切な物を持つものは、已むを得ず、船客共から、幾何かの袖の下を出すことになる。

支那の奥地には、軍隊や、土匪の收稅局が、澤山あり、官吏も色々な名目で、收稅法を案出する。釐金税は、外國側の要求で、止めることになつたけれども、支那の要所々に張られたる釐金の網は、斯くして實質的には、何時撤せらるべくもない。關稅の改正やら、釐金局の廢止を、眞面目になつて考へて居る外國人達には、この裏の真相は分るものではない。殊に揚子江上流地方では、今でも色々土匪や、軍隊によつて、私設の收稅所が出來て居り、河岸から、不意に發砲して、停船納稅を命ずるのが澤山ある。支那で、比較的確實とされて居る郵便も、電信も、盆暮には、公然局員や、配達人が、各戸に酒錢を要求して歩く。電報配達の様子は、規

則以外に、毎回十仙なり、二十仙なりを、手數料と稱して、酒錢を要求し、それを遣らなければ、次ぎの配達を、遅れさせられるから、已むなく金を遣ることになる。

漢口では、電報局員が、盆暮には奉加帳を持たせて、寄附を募つて歩くので、三圓、五圓と、取られたものである。また私自身は、民國十三年上海の郵便局で、某大商店から、四川の重慶に送るべき小包郵便(内容は確か銀製の煙草入を、十箇宛箱入れにしたものであつた)を、局員が内容検査と稱して、差出しの爲めに來た使用人らしい支那人に、開封させて居たのみならず、使用人と合意づくで、その一箇を失敬したのを、實見したことがある。まだ支那に慣れない當時の私は、アキれて物が云へなかつたことを、今尙ほマザンと記憶して居る。

それから支那の警察官であるが、これがまた大變なシロモノである。支那人は『一旦警察の手に掛つたら最後、事の善惡如何に拘はらず、若干の袖の下を出さなくては、無事に歸ることは出来ない』と云つて居るが、警察官は、良民を犯罪にカコつけて拘引し、幾千かの袖の下を、セシめることを以つて、本業として居るとしか考へられない。無論支那に於いても、英、佛、日各國の租界警察は、比較的良好であるが、それでも給料が安いので、辻々に立つ巡捕は、附近の受持區域の商店を、時々巡回して、長話をして、容易に歸らない。そこで商人は、一圓なり、五十錢なりの酒錢を、包んで遣るのである。モヒとか、阿片とかを賣る店からは勿論のこと、その他の店からも、幾らかづゝ貰ふので、月々のツケ届けが良いと、タマには萬引の一人位は、捕まへて呉れるが、それが資めてもの彼等の御恩返しであらう。

昭和五、六年、天津日本租界の巡捕が、白河の岸を通過する荷車から、毎回銅貨一枚宛徴集して居るのを、見たことがある。本人は、立番して知らぬ顔してをり、ボーイをして、一々徴集せしめて居るが、一日少くも七、八十仙から、一回餘りになるさうで、その遣り方の要領の善いにも、全く感心させられたものである。

支那の上下を通じて、賄賂公行は當然であり、また體面を飾る支那人には、種々巧妙なる賄賂方法がある。例へば賭博に招待して、カケ金を立てかへた風で、買いでやつたり、ワザと負けて、勝を譲つたり、この種の賄賂は、上下ともにイクラでもある。だから支那で、官吏を數年もやれば、一生の食料には困らない。民國八、九年、湖南の督軍であつた張敬堯は、三年間に一千萬元を、湖北督軍王占元は六、七年間に、最小限に見ても、三千萬元をタメたと云はれ

て居る。人々が官吏とならうとするのも、無理からぬことであると、云はなければならぬ。この項目は、金錢に関する記述が、餘り多くなつたが、支那人生活の大半は、金錢故であり、一事一物金錢慾を、對象としないものはないのであるから、自然斯んな結果になつたのである。

面　子

ラツキョウの皮―乞食にも面子―相見の禮―紙幣ピラで頬つ
べた―仲裁と警察―頌徳表―妙な面子―賈國奴―三千世界の
島―野蕪と間男―友人税―報國の裏

支那に、儀禮三千、威禮三千と云ふことがあるが、支那人位、形式、體面、外形を重んずる民族はない。「門を出づるに四馬を以つてし、住むに王公の構を以つてする」と云ふことが、彼等の理想である。體裁、體面、面子、外形、これは金錢慾と共に、彼等の日常生活の重大なる半面を形成して居る。

金も欲しいが、自分の顔も立てたい。これが彼等の切願なのである。これは矛盾であるが、支那人は飽くまで、この矛盾を通ほさうとする。支那人は、矛盾性が多くて、色々な相反する性格の持主であると云ふのも、斯んなところから起る現象である。例へば哲學者然として、悠悠日月の外に、人生を超越する點があるかと思へば、一錢、二錢の金を争うて、眼を皿のやう

にして喧嘩をする。金錢にケチで、金は咽喉から手が出るほど欲しい癖に、「男子功名を立てんと欲すれば、錢を惜むなかれ」などと、洒落れたことを云ふ。人から受けた恨みは、千百年も忘れ得ない癖に、人の御恩は、明日まで待たずに、忘れて終ふ。何處まで多面的であるのか、何處が奥底であるのか、その真相、眞諦の掴めないところに、支那人根性の本體がある。畢竟支那人は、ラツキヨウのやうな民族である。皮を一枚づゝ、終ひまで剥がして行くと、トウトウ皮ばかりで、一つも實はない。併しラツキヨウは、やはりラツキヨウである。奥行の分らない、實質の掴めないところが、支那人の本質なのである。

話が十分脱線したが、面子とは、體面、體裁、顔を立てる、男を立てるなど云ふことで、支那獨特の考へ方から、生み出された體面粉飾のことである。紳士も使へば、商人も使ひ、乞食にも面子がある。堂々たる口ヒゲの紳士が、ステツキをヒヤカして「お前のやうな斯んな立派な大きな店で、斯んなステツキを、十元に負からないやうでは、店の面子に拘はるではないか」と云へば、「オーライ面子」と、スグにも負けたいと考へるのが彼等である。反對に「アナタのやうな立派な口ヒゲを生やして、立派な眼鏡を掛けて、これが十二元に買へないでは、アナタの面子(估券)に拘はりませう」と云へば「オーライ面子」と、黙つて買つて行きたいのが、支那人であり、そこに面子生活の裏と表がある。例へばイクラ買物をネギつても、歩み寄りが出来ない時には、「爾的面子、還給五角」(御前の顔を立て、ではモウ五十仙出さう)と云へば、先方も「あーよろしい面子、面子」と云つて、納まるのが實際である。停車場あたり、衆人環視の中で、手拔かりなく、人につき纏ふ乞食がある。斯んな時、つき纏はれた人は、乞食に一仙ボンと投げ出してやるが、支那人は、つき纏はれた以上は、イクラか遣るのが、乞食に對する紳士の面子だと、考へて居るのである。

電話の急設を頼んでも、家の修繕を頼んでも、苦力や、大工は、仕事のお仕舞には、必ず酒錢を呉れと云ひ出す。金持や、紳士は、催促されない内に、これを出すのが、彼等の面子であると考へ、また催促した以上は、タトヒ十仙宛でも、貰はなければ、納まらないのが、苦力共の面子である。

その癖先方から、イクラ呉れとは云はない。車夫の如きも「アナタの御隨意に」と云つて、決して金高を明示して要求はしない。「見計ひで呉れ」と云ふのが、彼等の相手に對する面子で

あるが、一度この見計ひが、彼等の目算と違ふ場合には、急に本心を晒け出して、猛然と喰つて掛り、大に正義論を振り廻すとか、または最初の君子振りは、何所へやらカナぐり捨て、急に極端なる貪慾振りを、發揮する場合が多い。

支那の高官、顯吏等は、何かの場合に、突然辭職を申出でたり、或は就任を、辭退することがあるが、これ等は一應申出で見るだけであつて、彼等の本心ではないのみならず、時としては、相手の信任を試験する目的で云ふ場合が、數次ある。孔明の三顧の禮なども、或はこれかも知らぬ。支那人を招待した場合に、必ず一度は差支ありと、辭退して來るのが常である。これも相手に對する自己粉飾や、信任問合せの面子であり、遠慮であることが多く、再三勸めると、初めて出宴する場合などがある。また時として、宴會半ばに、先約ありと稱して、退席したり、定刻よりもワザと一、二時間遅れて來るなどは、皆彼等の驅引や、風延である。風延(敷衍)とは、心にもないことを、御追從に合槌を合はすことである。

支那人が能く「御招待したいから、何時が善いか」など、御都合を聞いたりするものも、これまた御世辭の場合が多い。當方が斷つて、これ幸ひと、スグ招待を取止めたり、また善い氣になつて、招待に應じて、出席して見ると、存外ヘンな場面に出つ喰はすことがある。だから何れにしても、相手の面子を潰さないやうに、應答するのが禮であると、唯それだけを考へて、さて實行の能否は、全然別ものとして考へるのが、安全である。支那に相見之禮と云ふことがある。明日競馬に行かうと誘へば、先約があつても、先づ「行きませう」とその場は回答し、アトで急用があるから斷るのが、禮である。つまり先方の提言を、頭から否認しないことで、一應顔を立て、遣ふことである。

併し面子なる語は、實利的なる支那人に、少なくとも自制と、反省とを與へるものであることは、見通がしてならぬ。個人主義、利己主義の彼等が、意外に人間らしい行動をすることのあるのは、この民族の上下を通じて、深くその心の奥を支配する、面子根性そのものゝ効果であらねばならぬ。

支那人は實利的である。金錢には目がない。かと云つて、それならば、紙幣ピラで、頬つべたをブン殴つても、喜ぶかと云ふと、必らずしも然うは行かない。叩かれたことそのことが、彼等の非常な利益であつたり、またはその紙幣束を、そのまま貰つたとしたところで、周圍に

人が見て居るか、若しくは他にヨリ以上の利害関係がある場合は、彼等は敢然として、これに反抗するのである。面子とは、顔を立てることであるが、人が見て居らない時であり、都合の善い時は、何時でも屈從にもなり得るのが、彼等なのである。

だから支那人は、色々な場合に、色々な意味に、面子と云ふ熟語を使用する。例へば斯うして貰へば、自分の顔が善い(面子大)、體裁がよい、キレイだ(好體面)、私の顔に免じて(我的面子)、何の面さげて(有面子慶)(上海では有面孔否)等と、色々な場合があるが、愛錢の民である支那人を使ふのには、また同時に、彼等の面子心を利用することを、忘れてはならない。

彼等は交渉が困難に逢著するか、事件が難局に向つた時は、面子を振り廻すが、斯んな時に「お前の顔を立て、」とか、「私の顔に免じて」等々と、彼等の退路となるべき方法を與へ、面子を潰さないで、善い案を持ち出す時は、容易に、且つ婉曲に事件を解決し得るものである。

民國九年、山東坊子で、數年來支那人劉某から、土地と家屋とを借り入れて、支那式家屋まで建増しをして、雜貨商を營んで居た某日本人があつた。主人の死亡によつて、家族は、急に内地へ引揚げることになつたが、家主兼地主たる劉に相談しても、家屋の買上げを承諾しない。そこで他の支那人に相談したところが、これを知つた地主劉は、支那人の習慣上、所有地上の建物を他人に買はれては、面子が悪いとの觀念から、「他に買手があれば自分で買ふ」と云ひ出した。價格七、八百元のを、三百元と主張し、他の人々が、汝は面子で買ふのに、三百元では、面子が悪いことはないか。「婦女子の歸國に踏倒しては、徳義上悪からう」と云はれて、遂に五百餘元で買取つたことがある。支那人の交渉には、公私ともに、この種類の面子が、有効に利用され得る。

支那人は喧嘩をしても、第三者が、私の顔に免じてと云ふので、間に這入れば、その仲裁者の地位とか、立場から、タトヒ多少は不足な條件であつても、仲裁は、時に取つての氏神、特別の利害のない限りは、先づ解決するものである。

彼等は、また支那の警察沙汰や、裁判沙汰が、如何に損害であり、如何に厄介であるかを、ヨリ以上に痛切に知つて居る。だから、厄介な警察なんか頼むよりも、自衛自利の考へから、同業者や長老の仲裁に甘んじて、長老の顔を立てることが多く、斯くて面子は、屢々法律よりも、有効に利用されることが多い。併しまた妙なところに、面子を持ち出すこともあるので、

困ることがある。例へば、ボーイに暇を出さうとすると、何等かの善い名目がない限り、タトヒ泥棒をしたから、暇を出されるにしても、長年茲に使はれて居たのに解雇せられては、友達に對して面子が悪いと、勝手なことを云ふ。その癖自己の過失や、不正のあつたことは、勿論知らぬ顔の半兵衛で、この邊のところは、頗る圖々しいものである。

苦力等が、使用人の云ひつけをイヤがる時に、世話人などが云ふ「我的面子」、すなはち自分に免じてと云へば、彼は唯々として讓歩する。何かの際に、汝はそれでも面子があるかと云へば、大抵のヤツが、顔を赤くして、利害に拘らず、反省をする美風もある。

この邊までのところは先づ善いが、面子も段々形式的に利用せられ、外面を飾り、心を偽り、或は外面謹直を装ひ、溫顔を装ふやうになつたのは弊害である。従つて直情勁行または溫雅の風を失つて、眞心を枉げて、形骸に囚はれ、口と心と、相反する行爲が、支那人に多くなつたが、これは面子から變化した悪弊の一つである。だから例へば、支那人に試みに酒を飲むかと云へば、僅かにとか、または否と答へる。その癖彼等は、常に大酒飲みであると云つた場合が多い。また彼等は、數次今晚一緒に御食事しませうとか、或は芝居に誘つて呉れたりする。併しそれは、單に彼等の官話(應酬語)であることが多いこと、前に述べた如くであるから、ウツカリその手に乗らうものなら、ヒドい目に合ふこと受合ひである。

彼等には、知事の悪政に困ると、反つて頌徳表を奉つて、諷刺する風さへある。暗に罷めろと云ふことを示すのである。頌徳表を奉られた知事は、四圍の空氣を看取して、體裁よく名目を設け、潮時を見て、その位置を去るのが普通である。また賄賂を取るにも、世間の思惑と、面子と口實とを考へる。つまり日常生活の、些細なことから、天下國家の大事に至るまで、それ／＼面子が入用である。國家の體面を衒ひ、自己の體面を衒ひ、富を衒ひ、學を衒ひ、道を衒ふのが、支那人である。彼等は、實利と、體面とを併得しようとするが、これが兩立せない場合は、世間の人士さへ知らなけりや、國家の實利を、失ふとも顧みず、顔に唾きせらるゝも、自己の實利を取らうとする。交渉事件等の際にも、自己の將來と、職權上、自己に實利なしと見れば、彼れは口を極めて、大義正論に言及したり、形式論や、體面論を振翳して、逃げ口實を求めたり、または責任轉嫁の口實を求め、上司には、體裁の善い報告を出す習慣がある。

會て大正八年だつたと思ふが、チチハルで、村井少佐一行が、黒河への旅行中慘殺されたこ

とがある。そこで加害者である馬賊告天を、取調べの際、督軍は、日支共同審問の必要を理解し、また實際審問は、我が調査員の技能に待つの外なく、支那の軍法課長は、單に通譯を務むるのみなるに拘らず、『審問は、必らず支那軍法課長の口を経るを要す』と、外形論をガンばかり、問題を實際に取扱ひたるが如く、上司に報告したことがある。それからまた大正十年春のことであるが、ボグラニーチナヤ事件の交渉後、支那側代表張某は、謝罪の爲め來訪したが、彼れの席として、入口に近く椅子を設けてあつたら、彼れは彼我左右に對座せんことを請うて已まず、また式場では一應挨拶を述べ、然る後謝罪すべしと云ひ、外觀上飽くまで彼我對等であつて、謝罪の爲めに來たのではないといふ風に、部下及び外部に對して、裝ふことに腐心した事實がある。この種の體面粉飾は、支那人が常に遣ることであつて、天津でも、昭和五年公安局の某課長は、日本側に謝罪に來ながら、列席の支那人に、謝罪をしたと見られることを恐れて、特に日本語で、謝罪することを申入れたことがある。

日本人は、何か一つの事件の起るごとに、謝罪と賠償とを、要求する癖があるが、支那人は、愆が深いから、金を出すことは、舌を出すよりもイヤがる。また人の前、殊に部下の前で、謝罪することは、面子上からも、部下の手前上からも、自分の首を切られるよりか、まだイヤなのである。支那人と、交渉や掛け合ひをするには、この點を心得て、御本人の懷を損じさせないで、政府の金を出させるとか、謝罪はコツソリさせるとか、略式の自筆の文書で済ませるとか、この邊に、彼等の面子と、金錢愆の兩立する遁げ道を、明けて置いて遣る必要がある。

排日運動の際、日本人と來往することは、賣國奴と云はれはすまいかと、極度の世評を氣にしながら、裏面では、自己の發財の爲めに、コツつくのは彼等である。曾てハルビン取引所新設の際、十萬圓をセシめて、澁々その成立を應諾した吉林督軍孫烈臣が、張作霖から『斯の如き事業を容認するのは、賣國奴である』と罵らるゝや、急に今までの契約を破棄して、官憲の威力を以つて、取引所を壓迫し、支那人株主を捕縛して、彼れの面子保持に努めたことがある。この際取引所關係者だと稱して、數名の支那人が、逮捕せられた爲め、他の株主は、急にその所有株を賣却し、一齊に新聞紙上に、自己の無關係を廣告したが、彼等は、排日運動の手前上、躊躇しながらも『競馬は社交の要具だから』と云つて、投資した連中である。金と、世間の面子との兩立には、支那人も、餘程苦勞するものと見える。また賣國奴と罵らるゝことは、

彼等は無上の汚辱と考へる辨に、金が欲しさに、賣國をコツソリ遣るのである。

大正十一年ハルビン警察は、賓江時報が、官憲攻撃をした爲め、社長某を拘引したことがあ
るが、地方の有力者胡某から、金を出して赦免を懇願した爲め、署長は胡の面子を立てる爲め
と、自己の體面を兩立させる爲め、結局初めの意氣込みにも似ず、有名無實の拘留二日で、済
ませたことがある。面子、面子と云ひながらも、金と利害次第では、如何やうにも抜け道を拵
らへるのが、彼等である。世間の口さへなけりや、金と情死がして見たい。『三千世界の烏を殺
し、金と添ひ寝がして見たい』のが、彼等である。

面子とは、悪く云へば、人前を氣にすることである。個人間に於ても、人前で面罵され、人
前で謝罪を要求されると、殆んど絶対に反抗的結末となるか、或は公衆の前に於いては、口角
泡を飛ばして、堂々たる強論を爲す。併しながらこれは表面であつて、支那に馴れない人は、
支那全土に互る排日の傳單やら、紙上の排日論調を見て、驚くのであるが、事實はそれほど彼
等は感情的ではなく、また腹立まぎれに、白刃を振り廻すほど、ノボせては居らぬ。瀕死の親
に、治療代を出すよりも、それで棺桶の善いのを拵へた方が、孝道であり、面子が善いと考へ
るほど、冷靜な民族である。彼等は、利害に冷靜であると共に、一面唯賣名の爲めに、驅引の
爲めに、面子を利用することが數次である。そこで彼等の利用するものが、その何ちらである
かを鑑別することは、大切なこととなるのである。

さらに彼等は人の醜惡を問ふのは、面子を踏み倒すものであり、非禮であると考へて居る。
支那人は、能く好んで野糞をする。大きな左巻の小山を築きながら、青空を望んで、大砲一發
打つ放すあたりは、天來の風流兒であるが、併し君子は、人の醜場面を覗くものではない。野
糞の現場は、横を向いて通るのが、君子の面子であるとして居る。また副官や、ボーイが、主
人の妾や、細君と、良い仲になるのがザラにあるが、主人は知らぬ顔をして、別な理由で、ボ
ーイや、副官に暇を出す。出て行くものも、知らぬ顔で、口を拭つて、ユスリがましいことを
云はないのが、相互の面子尊重であると考へて居る。

妥協性に富み、利害に敏感なる彼等は、利益の爲めには、公然その妻妾を上官に奉つて、平
氣である。金を借りるが爲めには、如何に面罵されても、厚顔無恥。金さへ手に入れば、構は
ないと云ふのが、彼等の態度である。官金を消費した官吏が、一年ならずして、再びその職に

就き、平然たるあたりは、如何にも支那式ユーモアに富んで居る。罪は一回だけで、古い罪は問はない。骨董も、また時節が来れば、世に出ると云ふのが、彼等の信念であり、道德であり、常識である。

面子は、自分だけでなく、他人の爲めにも使はれる。知事、保安隊長等が、常に數名の部下を連れて歩くのは、自己の威容を保つ爲めであるが、來訪する人に對して、衛兵を整列させたり、車馬を提供することは、客に對する面子だと心得て居る。従つて支那では、他人の體面を尊重し、他人の體面を繕ひ得る人を、才幹があると云ふ。一般に自己の欲せないことでも、他人の面子の爲めに、これに賛同することは、前に述べた通りであるが、例へば妓女の水揚げには、友人二、三人と會食するが、料理代と水揚げ料は、友人等が負擔するのが、面子であると考へて居る。これを友人税、または知人税と云ふのである。

また來客をソラさない爲めに、一夕の卓を共にし、恰も十年の知己のやうに、打ち解けた態度を示すことがあるが、これは彼等が客を遇するの禮であり、客の地位、または紹介者に對する面子である。これを以つて日本式に考へて、胸襟を開いて、百年の知己を得たやうに考へたら、それこそ大間違ひである。

支那人の面子なるものは、戦争にまで及んで居る。古き支那の戦争は、先づ通電に始まり、相手の非を擧げ、愛國愛民を振り翳して、對手を賣國奴と罵り、その面子を傷けることに腐心する。こゝに謂ふところの「聲討」なるものが、發生する。それからまた敗戦の時だつて「我れ天の民を傷つくるに忍びず」とか、何とか通電をするのが常で、形勢が悪いからとか、或は懐がフクれたから、戦は止めだとは、決して云はない。上海戦でも「一死報國血を以つて、黃浦江を染める」など、蔡廷楷は上海でホザいて居つたもので、進退坐臥、總てこれ體裁と口實が、入用なのが支那式である。要するに金も欲しいが、面子も入用であり、實利と賣名とを、チャンボンに行きたいのが彼等である。もの窮するや、すなはち必ずや面子で打開する。

外交談判でも、政治問題でも、その内容の如何に拘らず、彼等當局者の面子を尊重し、輿論に對する態度と實益に對する名目とに、退路を明けて置く時は、問題を圓滿なる解決に導き得るものである。日本人は、支那人をアヤつることに於いて、マダ／＼この邊の研究が、足りな

忘 恩

肺肝と天日—叛逆の名人—利用された日本—御禮は現場で—親切は斧で—
恩義は商取引—神様も御商賣—豫讓野暮—命がけも表情で

支那の歴史を通覧するに、歴代の革命なるものは、多く忘恩叛逆の歴史である。古代では、商の夏を亡し、周の商を滅したるが如き、春秋戦國の興亡の如き、或は漢の高祖の創業の臣、張良、韓信が、諸侯に奉ぜられるや、これを機として叛旗を翻したと傳へらるゝが如き、唐の安録山が謀叛せるが如き、最初忍従を以つてし、然して暫らくして勢力を得るや、俄然爪牙を露はして、主家の顛覆を圖る。恩を蒙むるも恩とせず、徳に浴するも徳とせず、反つてこれを利用して、私利を圖るといふ風が、昔から濃厚である。利己に徹底して居る彼等は、人に恩を享けても、恩を施すは利用の手段であり、報酬を得る爲めの賣買である位にしか考へて居ない。柳子厚といふ人の墓碑銘に「手を握り、肺肝を指して、相背負せずと誓ふ。直ちに信すべきが如きも、一旦小利に臨めば、纔かに毛髮の如きも、相讎らざるが如し云々」と書いてあるが實に支那人の不信を穿ち得て妙である。

支那人が、恩顧の人に叛いた例は無數にある。宣統三年、武昌に革命起るや、袁世凱は、内閣總理の地位を利用して、反つて清朝を裏切り、段祺瑞、馮國璋、曹錕等を利用して、國體改革と、清帝の退位を迫り、百年の恩に報ゆるに、仇を以つてし、特別なる恩顧と、寵遇とを捨て、恥ぢとせなかつた。民國になつてからでも、四川の熊克武は、劉存厚を驅逐せんが爲めに、雲南の唐繼堯の力を利用し、一度その位置を得るや、陸榮廷と通じて、唐繼堯に反對し、その軍隊を攻撃した。雲南の顧品珍は、唐繼堯股肱の部下であつたが、唐の大雲南主義が敗れて、名聲地に墜ちるや、自らこの機に乗じて、唐を省外に驅逐した。さらに湖南の趙恒惕は、譚延闓恩顧の後輩なるに拘はらず、譚を壓迫して、自ら遂に湖南督軍兼省長の位置を奪つた。それから吳佩孚は、元と湖北督軍王占元の知遇により、第三師長の地位を得たのであるが、王占元部下に兵變あるや、これを機會として、蕭耀南をして、遂に王占元を驅逐して、これに代らしめた。最後に馮玉祥が、民國十三年、吳佩孚の窮境に乗じ、反つて奉天軍と通じて、叛旗を翻が

へし、北京に侵入したことや、同十五年郭松齡が、灤州に叛旗を翻して、張作霖に叛いた如きは、餘りにも顯著なる事實である。

支那の統治者が、自己の利害と、打算の爲めに、叛逆を敢てし、忘恩的行動を爲したことは、二十四朝の歴史が、餘りにも多くこれを語り過ぎて居る。一般に支那人は、極度の利己觀念より、昨日の味方も、今日の敵となり、今日の友も、明日の仇となることが通常である。日本の志士は、孫逸仙や、黃興が、日本の保護を受けて、革命運動を成就しながら、排日運動に加擔したり、或は梁啓超、谷鐘秀等、日本の援助を受けたものが、一度相當の地位を得るや、賣名と、自己の都合から、反日的態度となり、排日となるに驚いて居るが、昭和二年、蔣介石が失脚して、日本に遊ぶや、利害を超越して、これを援助したものは、日本の朝野であつた。然かも排日毎日の急先鋒となつて、國民黨をリードして、學良を煽て、終に滿洲事變を激發させたものは、彼れ蔣介石ではないか。日露戦争の間、露軍の別働隊として、一時日本に反抗した張作霖が、福島大將に助けられるや、彼れは三拜九拜して、我れ日本の爲めに、この恩を報ぜんと、誓つたではないか。然かも彼れの晩年が、如何に排日であり、毎日であつたかは、今さら述べるまでもあるまい。歴史上の主要なる人物にして、既にこれである。その以下の人士が、恩を仇で返へし、冷酷と、叛逆を以つて、舊恩に應酬するのは、敢て珍らしいことであるとは云へない。これに就いて、以下さらに數例を加へる。

日露戦役の末期に、法庫門の野戦病院に勤務して居た一看護長があつた。彼れは土人の施療を負擔したことから、土地の人々と懇意になり、彼等から別れを惜まれるやうになつた。そこで彼れが、現地を引揚げんとするや、土地の某々有力者等から、平和克服の後、再び是非この地に來て、開業して貰ひたいと懇願されたので、土人の言を信じた彼れは、凱旋後遙々と、この地に來たが、某等は、彼れを待つに路傍の人の如く、頗る冷淡で、何等の便宜をも與へなかつた。これは支那人の御世辭、謂はゆる「官話」と云つて、御座なりの御愛想を云つたので、この御世辭そのものが、つまり單なる御禮の積りなのであるが、これを知らないところから起つた、氣の毒な話である。

北清事變の際、日本人から危急を救はれた一支那人は、京都の商業學校へ、支那語教師として世話されたが、後年彼れは、奉天中學に轉任し、世話した人も、奉天に商業を營んで居たけ

れども、その支那人は、生命の親であるこの日本人を訪問もせず、途中出逢つても、逃げるやうに隠れて居た。支那の諺に「生命の親に二度會ふな」と云ふことがある。命を助けられたやうな恩人には、何時何んな謝禮を、要求せられるかも知れないから、避けると云ふのである。私も、支那の要人を、兵亂の渦中から救出したことが、一再ならずあるが、多年この諺の眞味を、實地に體驗させられて、微苦笑を漏らしたものである。

大正六年漢口で、支那の某大佐は、母親が、難病で入院を嫌ひ、且つ苦しむと云ふので、強ひて日本醫に自宅手術を懇願し、「母の大病なれば、如何なる犠牲もイトはず」と三拜九拜しながら、手術後二、三日で、悪性の癰疽も直ほり、月餘にして回復したが、彼れは爾後治療費も、藥價も拂はず、途中では、顔をソムけて通ると云ふ有様であつた。

雲南某高級武官は、幼少から身體が弱く、親の懇切なる指導で、漸やく相當の位置を得たが、一旦兵亂に逢ふや、親を捨て、一人亡命し、兩親は、爲めに憤怒失望の極死亡するに至つた。

昭和の初めごろ、滿洲その他に於ける學生の狀況を見るに、成績悪ければ先生の罪だとし、落第すると、先生が自分に親切でないとい恨み、數年の學校生活を送りながら、一度門を出づれば、また振り向きもしないのが、ザラにある。日本人の教育を受け、日本人の親切によつて、相當の地位を得ながら、一度その位置を得るや、地位と、權力を濫用して、私利私慾に没頭し、恩義よりも位置が大切、他人よりも、自分が大切と云ふことを、露骨に表示するのは、常に彼等であつた。

下級の支那人の忘恩的行動は、更にヒドいのがある。青島で、多年支那に居住した一外國人は、或る事情の爲めに、歸國することになつたが、その準備中、多大の私財があるのを見た支那人ボーイは、數年間使はれた、極めて正直なボーイであつたにも拘はらず、その外人を殺して、金を盗んで終つた。利慾の爲めには、反覆常なく、恩を仇で報ゆる實例である。

大正十年のこと、山東鐵道の丈嶺驛前の一支那人は、用心棒に雇つてあつた支那人から、百元内外の金を見せた爲め、殺されたことがある。金が欲しさに、恩顧の人を殺すことは、彼等としては平氣である。支那の下級使用人は、金を得ることが容易でないのと、雇傭關係は、恩義的でない商取引であると考へる爲め、數次金錢の爲めに、非道なことをするのである。彼等は、利己心の爲めには、十數年來の雇人でも、時に主家一族を斃殺し、或は放火する等の例

は、殆んど枚擧に遑まないほどである。

大正五年、奉天の一市街で、捨てられた八歳の小兒を拾うた山本某は、懇切に保護を加へ、十五歳まで靴工として訓練を與へたが、自己の職業を覺えると共に、店にあつた若干の靴を入質して「自分は無給であるから、過去の勞働に對する報酬としては、これでもまだ安いものだ」と、平然として去つたのがある。大正五年、四平街の特産物商岡某方の十年間も使用せる支那人ボーイは、主人の不在中、細君を殺して、金を窃取逃亡した。大正十年、四平街小迫幸太郎は、家族同様に優待し、八年間も使用したボーイから、主人の不在中三千五百圓を持逃げされた。大正七年、奉天在住某下駄商は、五年間使用した支那人ボーイに、一家四名が、下駄製造用の斧で以つて慘殺せられ、前日手に入れた百餘圓を取られた。

奉天の某病院長の感想を聞くに、支那人患者は「命の恩人だから、必ず報恩する」と口に云ふけれども、後になつて訪ねて來るものは、三十乃至四十分の一である。これに反して蒙古人は、黙々として去るが、五年、十年の後に至るも、機會あれば、必らず來訪して、謝恩の意を表すると云つて居る。

支那人の謝恩觀念は、日本人のそれとは、多大の懸隔がある。支那人と雖も、謝恩觀念が、絶無ではないけれども、報恩は一種の禮節と心得、禮節は衣食足つて、始めてこれを全うし得るもので、要するに謝恩は取引である。自分の都合が悪いのに、無理に奉仕謝恩をする必要はないと考へて居る。また報恩は、その恩の輕重、大小に應じ、相對的、打算的に報恩すべきものであつて、一事をなせば、報酬的に代金を與へると、同一であると考へ、精神的よりも、物質的に謝恩を考へる風がある。御禮も、交換的であり、その場主義、剝那主義なのである。従つて支那人は、神様を拜むにも、謝恩主義ではなくて、因果應報主義である。昨夜悪いことをしたから、明日にも崇られては困ると云ふ考への爲めに、神様を拜むのであつて、故なく神を拜むなどのことはない。財神廟、馬神廟、娘々廟など、試みにその扁額を仰げば「有求必應」と書かれてある。支那では、神様までも、ナカ／＼實利的である。神様も「オレに御願ひをすれば、必らず御利益を授けてつかはずぞ」と云ふ譯で、どこまで即效主義、交換主義であるのか分らない。

我々日本人は、神社寺廟の前を通ると、自然に拜みたくなる。私が曾て田舎旅行をした際、

孔子廟の前を過ぎて、脱帽敬禮したところが、ボーイ曰く「旦那、昨夜何か悪いことでもしたか」、イヤと云つたら「では何か御前は、孔子様の親類か」と云つたことがある。自己の祖先でもなし、また何等求むるところなく、さらに罪滅しの爲めでもなくして、他家の神様を拜むなどは、彼等の到底解し得られない謎である。

だから日本人は、能く日支親善等と云ふけれども、この一語を聞いて、支那人の頭に、ピンと来るものは、利益交換主義である。求むるところなくして、我れに近接することはない筈であり、不可解至極なことであると、彼等には不思議に思ふ。そこで「ハ、ア日本は、土地貧にして、五穀豊かならず、石炭なく、鐵なし。成るほどこれで分つた。善哉々々、我に好策がある。經濟絶交！」だと考へるのも、彼等として當然なのであらう。一體に物事を僻んで考へること、機會あるごとに、自己を成るべく高價に、人に賣附けようとするのが、彼れの傳統的的政策である。だから日支親善を昇ぎ出すと、彼はすぐその裏を考へ、反つて日本の困るところを、成るべく強く壓へて、自己を有利に展開しようとして、彼等一流の驅引勘定に、這入るのである。

支那人の道德觀は、親子の孝道を第一とし、「孝は百行の基」として、流石に親子の關係は、離散することは稀であるが、孝道は供物、奉仕、慰安、尊敬等の外に、祖先崇拜、家門、子孫の繁榮にまで及ぶけれども、謝恩的ではなくして、多少交換主義、因果應報主義なところがあつる。親を大事にし、祖先を祭れば、自己に福が來ると云ふ現實主義が、何所までも附纏うて居る。

師弟の恩に至りては、時々美談を聞くこともある。謝恩會とか、老師を敬ふとか、曾て大隈侯の死に對して、早大支那學生の拂つた衷情の如きも、見るべきものがないではないが、最近の學生根性は、前に述べた如く、多く交換主義であり、代償主義である。

君臣の關係に至りては、謂はゆる知遇に對する應酬主義であつて、三顧の恩に感激する孔明の如き、豫讓の死節の如きも、何所までも知遇の報酬本位である。「豫讓野暮、女郎買ひでも忠は出來」と云ふ川柳があるが、大石と、豫讓を比較した譯でもあるまいが、カタキ打ちの切賣をやり、商取引なみにやるのなら、何も乞食の眞似までせんでも、日本の大石は、祇園で遊んで居ても、モツとく大業を遣つたぞと、皮肉られても一言もあるまい。「民従はざれば王去

る。これが君臣の道に對する、支那人の考へであつて、日本人の如き感激と、犠牲とを本位とする忠道は、支那にはないのである。

主従關係は純然たる雇傭關係のみで、報酬の外に、門錢を取り、賄賂を貪り、他に善い奉公口があれば何時でも去るのが、彼等である。或る日本人は、青島で、某支那人を、支那の役所に轉旋したことがあるが、その支那人は、經濟上頗る不如意であつたので、就職前、一時生活上の金錢までも、援助して遣つたものである。然るに彼れが、一度び職を得るや、月日と共に、過去のことを忘れ、後には先方から、コツチを虐めるやうなことにすらあつた。

先年膠州の或る日本人の家で、二人の支那人が増俸を要求し、家計不如意の故を以つて、相前後して暇を取つたことがあるが、數日を出でずして、その一人は舊主に舞戻つて、恬然として、再び使傭を乞ふたことがあるが、コンな例は、餘りに澤山に有り過ぎる。従つて支那人を使ふには、他所よりも給料を多くして、非常に過度の仕事に命ずるが善い。斯うするならば、一つ二つブン殴つても、金故に奉公を怠たらない。これは支那人自身の説であるが、穿ち得て妙である。

支那人は、お禮を云はぬ國民である。招待をされた時にも、今晚は有難うと云へば、歸りは黙つて歸る。歸りにお禮を云へば、明日は云はない。來る時も、歸りも、翌日も、トウ／＼御禮らしい顔もしないものもある。日本人は、道で出會うても「ヤア先日は失禮しました」とお禮を云ふ。四、五日たつても「この間は有難う御座います」と、思はず云ふのであるが、支那人は、御禮は一度云へば澤山である。有難かつたと云ふことを、表示するだけで、命を助けられた御恩でも、帳消しになるものと考へて居り、恩義が深ければ、態度とか、様子とかで、念入りの表情をすれば、それで善いと考へて居る。

青島で、或る支那官吏が、三年の刑に處せられんとした時に、彼れの誠實悔悟に同情した一歐洲人は、彼れの爲めに非常に努力をして、遂に官に縋つて赦免させたことがあるが、その時彼れは三拜九拜して「この御恩は死すとも忘れません」と、述べて別れたが、爾後途上に出會うても、一面識だにない様子をして、顔をソムけて通過した。後年この外人が、彼れに一支那人の就職を依頼したところ、言下にこれを刎ねつけた。そこでこの外人は、腹に据ゑかねて、先年の事を語り出すや「あの時云つた言は、今でもよく記憶にある。併しそれは、人の就職を、

世話するとは、約束しなかつた」と答へたことがある。丁度張作霖の福島大將に於ける例と、好一對であるが、彼に云はすれば、死すとも忘れないと云ふのは、その言葉そのものが、既に十分謝禮になつて居る譯で、日本人の如く、終生その恩を忘れないと云ふやうな、律義な觀念からではないのである。

殘忍と冷酷

馬革—姪婦を裂く—血染の饅頭—人肉販賣—屍衣—

子女賣買—香具師—火事場—あゝ無情

支那人は、個人的にも、團體的にも、臆病で、勇猛果敢の氣象に乏しく、何ちらかと云へば、文弱の民である。併しながらその反面に於いて、弱者に對しては、頗ぶる猙獰なる殘忍性を、發揮する通有性がある。例へば官吏、土匪、兵隊、警察官などが、威力を笠に著て、弱者を感壓するのは、當然と考へられて居るのみならず、往々平民ですらも、力のない婦女子に對してすら、殘虐を恣にするのが少なくない。漢民族の殘忍性は、その因つて來るところ遠く、習ひ性を爲したものと考へられる。吳王が、その功臣吳子胥を憤死せしめ、その屍を、馬革に包んで捨てたと傳へらるゝ如き、秦の始皇帝が、その儒者を坑にせしが如き、また漢の高祖が、創業の臣梁王鼓越の肉を裂いて、諸侯に分配した如き、斯る事例は少なくないが、要するに人を慘殺

することは、毛虫でも踏み潰す位にしか考へては居ないのである。彼等は何の恨みのない場合でも、その獨特の殘虐性を、發揮する場合が多い。大正十一年一月宜昌の上流で、天主教の神父デューリアが、土匪に慘殺された時は、顔から腹部に、八十餘個所の刃傷があつた。

民國八、九年ごろと思ふが、湖北の督軍王占元は、兵變掠奪に参加した部下二千人を、故郷に追放すると稱し、孝感縣まで連れ出して、機關銃で盡殺したことがある。先年學良の奉天軍が、その某衛隊の武装解除をした時とか、昭和四年張宗昌の部下を、灤州で武装解除した時は、何れも訓示をするといふ名目で、將校等を集めて、機關銃でバラ／＼とやつたものである。これは今尙ほ衆人の耳に新なることであらう。

大正十一年上海で、日本人富尾某のボーイは、その兄と共謀し、主人の不在中に、富尾の夫人を細繩で縛り、發聲をさせぬ爲め、口に石炭をつめて、これを慘殺しようとして、絞殺未遂のまゝ遁げたことがある。唐繼堯に代つた雲南の將軍顧品珍はその部下の爲め銃殺滅首の上、その口に卷煙草をくはへさせられてあつた。以上は支那人殘虐の手ほどきとして、掲げた數例に過ぎない。

支那人は、一般に動物を馴らすことが上手であり、取扱ひも溫和であるにも拘らず、他の反面に於て、頗る殘忍な點がある。牛馬豚鶏を屠殺するに、頗る殘忍な方法を用ひ、豚を殺すのに、その悲鳴里中に及ぶが、これは、悲鳴を擧げさせるほど、その肉が美味いと考へて居るからである。ボーイは、家鴨を殺すのに、生きながら庖丁で、首をチョン切つて平氣であり、豚や、鶏の生血を吸つて、婦人でも尙ほ平氣の平左である。従つて動物を愛護すると云つても、溫情百草萬木に及ぶと云ふやうな、慈育の精神から出るのではないこと、勿論である。

日清戰爭の際、仲滿中尉以下四十七名の斥候が、遼東半島で、土人にダマされて、慘殺され、耳を削がれ、鼻をモガれ、針金で耳から耳へと貫かれて居たことは、當時有名な話であつたが、昭和六、七年の滿洲事變に於いても、鮮人を捉へて、活きながら皮を剥ぎ、眼玉を抉つて、公衆の通路に曝したのが、澤山あつた。四平街東北方附近に逃げた王以哲軍は、附近の鮮人部落を焼拂ひ、妊娠中の女の腹を斷割つて、胎兒を曳き出し、マダ動いて居るのに、銃劍をつき刺して、嬉々として笑つて居た。また鮮人婦人を強姦しようとしたが、背中の子供が餘り泣き叫ぶので、イキナリその子供を玄翁で撲り殺し、その婦人を輪姦した上、慘殺したのやら、輪

森の上、押切(牛馬の飼料を切るもの)で、生きたまゝ、女を胴中から二つに切つたりしたのがあつた。これ等の惨状を見ると、彼等は如何にして、殘虐行爲を現はすべきかに、努力苦心をしたのではあるまいかとさへ思はれる。

支那では、今尙ほ原始的な首馱りや、磔が、到るところ、裁判なしに行なはれて居るが、この際に於いて、黒山の如くに、見物して居る連中は、死刑者の首が、コトリと前に落ちるや、一齊に手を拍いて聲を立て、笑ふ習慣がある。これは死體が取りつかない爲めにやる、魔よけの迷信からだ、云ふことであるが、如何に考へても殘忍である。また死者の局部をナイフで切り、或は胸を斷割つて、その肝臓を持ち歸つたり、或は首が落ると同時に、寄つてタカつて、各自携帯の饅頭に、流れ出る血潮を吸はせて、藥用の爲めとあつて、これを喜んで食ふ習慣がある。

曾つて山東膠州の城内で、馬賊を銃殺した際、支那兵の一下士は、イキナリ死刑者の罌丸を、ナイフで切つて、手巾に包んで、平氣で持ち去つたが、これを見て居る見物人は、また平氣で笑つて居た。さらに忌むべきことは、廣東でも、濟南でも、また滿洲でも見たことであるが、支那兵は、婦人を慘殺したあと、殊に婦人を強姦慘殺した際は、必ず長さ一尺ばかりの木片を局部に挿入する癖があることである。濟南事變の時でも、滿洲事變でも、生きながら、石油を掛けて慘殺をされたり(生きた者は水泡が出来るからすぐ分る)、或は局部を切斷して胸に載せられたり、局部を持去られたりしたものである。これ等は、人を殺す場合に於ける、彼等の常習的習慣であるやうである。

以上の例の如きは、日本に對する敵愾心、愛國心の發露だと云ふ風に、考へられるかも知れないが、生きたまゝ面皮を剝がし、手足の指を切り、耳を殺ぎ、妊婦を、車に足を括りつけて引裂き、燒甕子をあて、炮烙の刑に處するなどは、隋の煬帝あたりが、慰み半分に遣つたばかりではなく、支那歴代の各所の内亂でも、滿洲事變でも、到る處で、支那軍から見せつけられた事實であつて、單なる敵愾心と云ふよりも、寧ろ殘忍行爲として、分類さるべきものである。コンな點では、土匪はまだ穩やかな方で、強姦、掠奪、慘殺は、支那の正規軍の方が、遙かに殘酷無道であるのだから、アキれる。

支那人の殘虐行爲には、彼等の人生觀、宿命觀も、手傳つて居るやうである。支那人が、案

外死に臨んでも、平氣であるのは、轉生説を信するアキラめの結果である。中野江漢の説に従
がへば、支那人が土葬を欲するのは、體さへ満足であれば、再び満足な人間として、生れ替れ
るが、火葬をすれば、轉生が出来ないと思つて居るからださうである。銃殺は恐れぬが、首を
切られるのをイヤがる風があるのも、首を斬られると、來世に蝎のやうな、首なし動物となつ
て、生れ替ると、信じて居る爲めである。

支那には、仇敵の肉を喰ふとか、その骨をシヤぶるとか云ふことがあるが、これは形容詞で
はなく、彼等は、實際仇敵を喰ふのである。蓋し仇人を食つてしまへば、未來永遠に轉生せぬ。
食はぬまでも、肉を裂き、骨を刻んで置けば、轉生し得ぬから、仇討ちをされる心配がないと
云ふ迷信からである。支那の刑罰に「凌遲」と云ふのがある。手足を、一本々々斬り離し、屍
體を細かく刻む意味で、斯くすれば悪人が、再びこの世に再生せぬ爲めであると云ふ。

史を按ずるに梁の武帝を餓死せしめた反將の侯景が、後に殺害されて、市に曝された時、土
民は、争うてその肉を喰つたと云ふ話がある。また殷の紂王は、自分の不行跡を戒めた翼侯を
災とし、鬼侯を腊にし、梅伯を醢にして、これを臣下に分配したと云はれて居り、齊の桓公の
臣易牙は、彼れの子供の肉を、桓公の食膳に上せたとあり、その他晉の文公、楚の項羽、隋末
の賊朱燦、唐末の賊黃巢等も、人肉を喰つたと傳へられ、五代の初め揚州地方では、年々の兵
亂に食用足らず、貧民は、夫はその妻を、父はその子を肉屋に賣り渡し、彼等の目前でこれを
料理して、羊豚と並べて、人肉を賣つたことさへあると書いてある。

支那人の人肉喰ひは、美食に飽きたイカモノ喰ひであるとも云へる。怨敵の肉を喰ふ等の外、
疾病治療の目的から、人肉を藥材として食用することは、古來公然行はれて居る。西部廣西の
苗族の一部には、自分の部落に泊つた外來人の占ひをして、村に幸福が來るとあれば、優待す
るが、不吉な占ひが出ると、これを殺して、その肉をたべる習俗がある。

支那人は、死屍に鞭つと云つて、屍體を虐遇することを以つて、非常なる侮辱罪惡とするの
であるが、支那の内亂戰を通覽すれば、兵變掠奪の度ごとに、幾多の殘虐が常に行なはれて居
る。民國八年、湖南の湘江道に於ける大虐殺は、全市一空、婦女子の屍體道に横たはるもの、
二千と云はれ、民國十一年、河南開封に於ける掠奪の翌日、往來には、手足がバラ／＼になり、
局部を抉られたる婦人の屍體が、散亂して居つたことを、自分は目撃した。彼等は、殆んど人

を殺すことによりて、愉快を感じるのではあるまいかとさへ、疑がはれる。然して斯くの如き掠奪の後には、住民は、死人の衣を剥ぎ取り、死骸は、その著衣を全部盗まれて、それこそ丸裸のまゝ捨てられ、紅萬字會とか、その他の慈善團體等によつて、埋葬せられない限り、多くは野犬の餌食となるばかりである。死人の著物を剥ぐことは、支那各地とも、民衆の通有性であるらしく、敢て珍らしいことではない。

支那人の習俗で、さらに見遁がすべからざることは、男女七歳以下で死する者は、父母に對する不孝の兒として、これを土葬することなく、屍を野原に棄てる習慣があることである。棄てられた屍は、犬や、鳥の餌食となつて居るのだが、これは支那内地各所で、何時も散見することである。

以上は死屍に加へらるゝ残忍であるが、つぎには生きた人間に加へられつゝある残忍を紹介する。支那の奥地に行くと、今でも奴隸的のことが行なはれて居り、四、五歳から、十一、二歳までの男女を、貸金の擔保に取つたり、金で買つて謂はゆる底下人(下女、下僕)として、一生涯コキ使ふのである。饑饉の際などには、食に窮した親が、各地で子供を賣る。上海閩北では、一人七、八円で賣られて居たのを、私も目撃したことがある。民國九、十年ごろであつたか、河南の田舎では、饑饉の爲め、子供一人と、饅頭二つと交換したのもある。またヒモジさの餘り、子供を殺して、その肉を喰つた支那人もあつた。親子の情愛の薄い支那人にあつては、この種のことは幾つもある。父母が、その子女を懲戒するのに、鞭撻數十、悲鳴庄里に徹し、衆人黒山をなすも、誰しもこれを止める者がない。又丫頭(下女)を虐待する慘狀は、言語に絶し、半死半生のまゝ、路上に投げ出したりするが、衆人みな累の身に及ばんことを恐れて、敢て口を挟む者さへもないのである。

親子でも、冷酷情愛のないこと、これでも人類かと、アキれるやうなのが澤山ある。先年山東鐵道の沿線で、一轢死人があつたので、その十六歳の實子を、現場に連れて行つたところ、彼は毫も愁傷の色をしなないで、反つて斯の如き場合には、イクラの慰藉料を貰へるか、聞かれたのには、一同啞然たるものがあつた。また反對に子供が重病で、手當て不十分の爲め、瀕死の状態になつて仕舞ふと、最早天命なりとして、落命を目の前に路傍に置いて、省みない親がある。

き取つて、個人的に世話をしてやつては、何うかと勧めたところ「若し死ねば、その所持金だけでは不足である」と云つて、取り合はない。傷も致命傷ではないから、その内住所も分るだらうし、相當の商人らしいから、謝禮もするだらうではないかと、勧めたけれども、「それは未定のことである」と云つて、敢て應じなかつた例もある。

支那の田舎を歩くと、子供を誘拐し、手や、足を切断し、或は關節を捻轉して、不具廢疾とし、これに乞食を稼がせ、或は見世物に使ふことが數次ある。子供の四肢の關節を、反對の方向に捩げて、獸類に似せ、所々の皮膚を剥ぎ取つて、豚毛を植ゑ、豚の聲色を使はせて、人と豚との混血兒で御座ると稱したのを、大正十年坊子で見たことがある。確か大正十五年頃、滿洲でも、子供の顔や、背中に獸毛を植ゑて、見世物にして居た香具師の殘虐が、新聞にあつたと、覺えて居る。それから大正十三年杭州で、十歳位の子供に、棒を両手に握らせたまゝ、頭上から背中を経て、兩足を通じて回轉させて、見物の金を集めて居つたが、その子供は、兩方の肩が、半脱臼状態になつて居つて、涙をポロ／＼出しながら遣つて居た。いま思ひ出しても、悲惨な感じがする。

さらに見遁がすべからざることとは、火事場に於ける彼等の冷酷な態度である。普通何所でも、支那人は、火災等の場合、自分の家が危険でない限りは、決して消防に努めたり、手傳ひなどはないで、大きな口を開いて、笑つて見物をして居るのが、風習ではあるが、家人は煙の渦巻く内から、必死となつて荷物を運搬して居るのに、見物人は手傳はないのみならず、中には未だホヤ／＼暖みのある焼残りの反物等を盗んで来て、見物人に賣つて居るのに、警官も、また黙つて居るなどは、到底支那でなくては、見られない圖である。大正十三年三月のこと。本溪湖太子河の坑木會社が焼けた時である。會社では、折柄居合せた支那苦力約三十名に、應援を求めたところ、彼等は「賃銀は幾何出すか」と云つて、頑として應じない。會社は已むを得ず、別に賃銀を仕拂ふことを約して、手傳はせたことがある。故に火災の場合、何等關係のない日本人が、必死になつて手傳ふのを見て、彼等が不思議がるのは、無理もない話である。所は山東鐵道の一驛柳家莊、時は大正十年のことである。タマ／＼火事があつて、近所の井戸を使用しようとしたところが、井戸の水が減ると云つて、何うしても使用を肯じない。後で謝禮をするからと

シめて、賣ると云ふのは、支那各地に行はれることで、自分も杭州で見たことがある。

確か大正五年のことであつた。暮の十二月二十五日に、大連から芝罘へ入港せんとする阪鶴丸が、折柄の大吹雪を喰つて、咫尺を辨せず、遂にその進路を誤まり、芝罘島の東端、裏勾の沖合にある小岩石に坐礁し、船客、船員等四百餘名が、救助を受くるを得ずして、七十餘名を除いて、總てが凍死するに至つた大悲慘事があつた。ところが、その當時、該船の遭難が、全市に傳はるも、支那の官民は、皆袖手傍觀、一人のこれを救はんと、奔走するものがない。全く以つて馬耳東風である。北海を、急激に襲つた烈風と、大吹雪は、當船よりの通報により、翌日救助のため、旅順より駆けつけた我が千代田艦をして、阪鶴丸に近づくことを得せしめず、またボートを下すに由なからしめ、救助の目的を達することなくして、旅順に引返へさしめたほどであつたが、何とかして、この多數の同胞の難境を救はむとする義氣と、意志の閃きは、同市の支那人間には、微塵だも動くを見なかつたのである。幸ひにして、この遭難者の中で、二十七日まで生殘つた七十餘名は、義侠に富む我が在留邦人の、非常なる苦心と、獻身的手段によりて、瀕死の際に救助されたのであるが、是等邦人の義勇なかりせば、残つた人々も、また見す／＼見殺しにされたことであらう。斯う云つたことから推斷すると、支那人には、何うも義侠的精神など云ふものはないやうである。身を殺して仁を爲す底の義に勇むことは、到底支那人に、見られざるものであると云つて、差支へがないと思ふ。「君子は危きに近よらず」とは、何等の例外をも設けずに、如何なる場合にも、一般支那人に遵奉されて居ると見て善いと、思はれる。

これも阪鶴丸の時の出來事であるが、我が日本領事の勸告と、愆愆とによりて、支那側に、漸く官民合同の救濟會なるものが設立され、船上、海底の幾百の死屍を陸上に移し、それ／＼の處分を講ずることゝなつた。ところが支那の水上警察の巡警共は、これ等死屍をジャンクで運搬途中、死屍の身體を検し、目ぼしい携帯品や、金員を、殆んど全部横奪し、甚だしきは、衣類までも剥ぎ取つたのである。これ等の死屍は、多くは出稼苦力と、出稼商人で、皆相當の金品を懐にしての歸郷の途上であつたから、巡警は、非常なる不義の收穫を擱んだ譯である。然ればその直後水に濡れたロシア紙幣の五百ルーブルのものを、行使した巡査もあり、また二

萬ルーブルを携帶して、歸乏した某店員の全額の有金を盗み取り、これを多人數で分配し、水上廳の重立つたもの共も、殆んどその分割に與つたことが暴露された。これ等のことを見ても、彼等が如何に平氣に、且當り前のことのやうに、この残酷事を行なつたかを知ることが得よう。要するに彼等は、些の憐愍の情をも持たないのである。彼等は、知人朋友にあらざる他郷の者に對しては一點の人間味すら持合せて居ないのである。何處に仁があり、何處に義があるらう。

裏から見た支那人 終

昭和十二年七月十三日印刷
昭和十二年七月十六日發行

版權
所有

裏から見た支那人
定價六十錢

著者 笠井孝

發行者 高山金一
東京市神田區小川町二丁目十番地

印刷者 田中末吉
東京市牛込區改代町二四番地

發行所 東京市神田區小川町二丁目十番地
高山書院
電話神田八一〇番 振替東京八三八九三番

發賣所 東京市神田區神保町二丁目五番地
栗田書店
電話神田二二七九番